源平盛衰記圖會

一

へ13
3309
3

へ 13
3509
3

源平盛衰記圖會卷之三

目錄

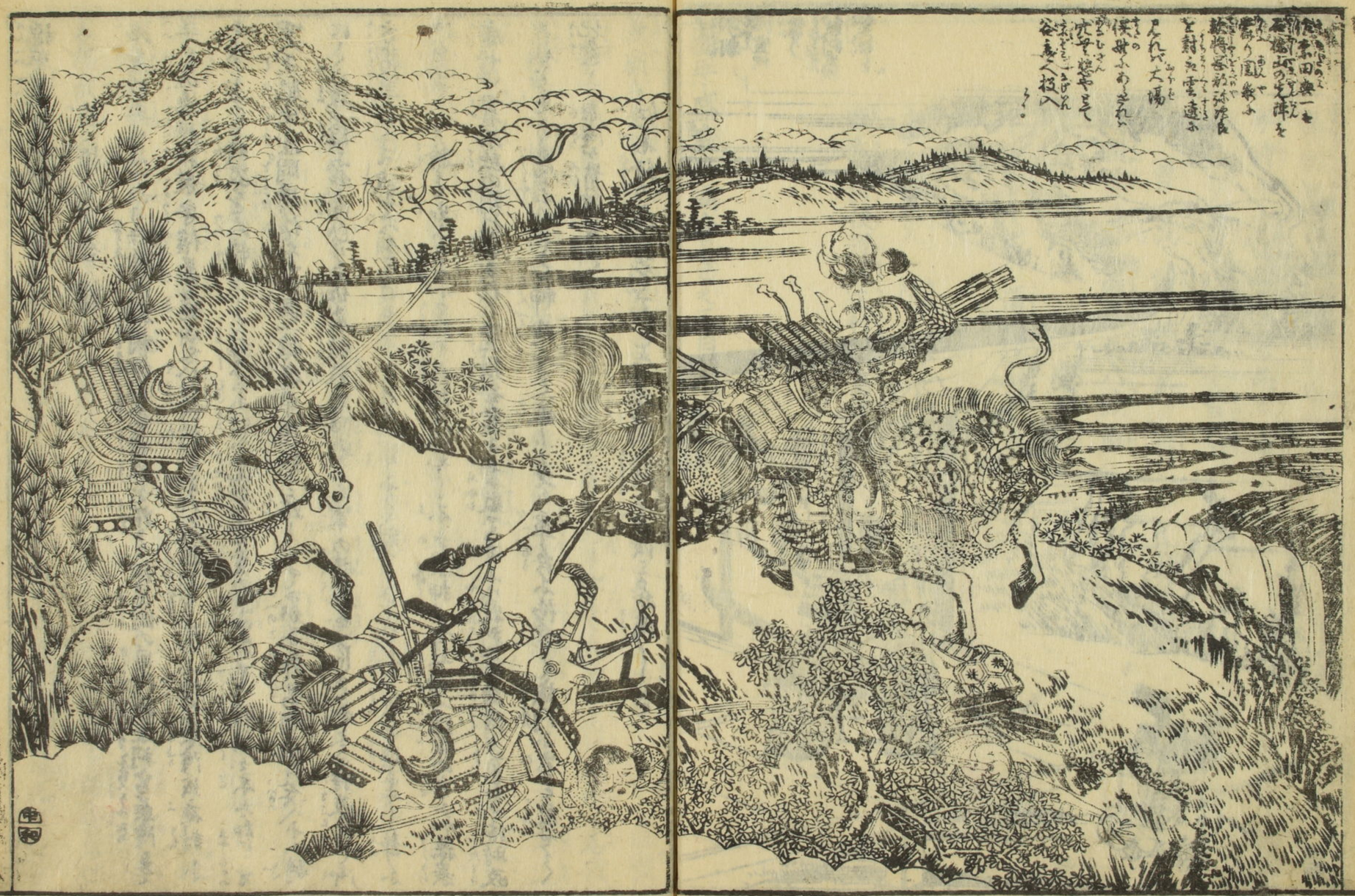
石橋山合戰
佐奈田俣野組討
公藤介切腹引楚効荊保喻
高綱賜姓名落頼朝卿
頼朝卿隱卧木梶原助佐殿
頼朝卿輿小道城地藏堂
大場魂早馬大政入道申宦符
頼朝卿催軍勢降參大場景親
平軍毛宣川西岸語眞盛歔美
平家驚水鳥羽音逃登京都

大正十年八月廿九日寄
本大學出版部

義經來賴朝陣誅大場以下
平將重衡燒南都兩大寺
東大寺大勸進剃髮小督局
木曾義仲揚義兵
諸國源氏蜂起馳早馬六波羅
大政入道清盛薨去
平相國入道非常人
祇園女御
夜泣兒院子譯
源氏追討使彈經正竹生島琵琶

此忠盛ノ条一ノ巻豊ノ明ノ節會ノ次ニ可入

源平盛衰記圖會巻之三目錄終


能登守教経
平家の公達
ふかく
ふかく
ふかく

源平盛衰記圖會巻之三

石橋山合戰

治承四年八月十六日長狹佐賀朝卿北条時政を招く伊豆國の目代和泉判官兼隆を平家の傍親和泉守信兼の婿なる八牧の館ふもれば八牧判官ふつふ兼隆夜討ふまべしとく時政を大將として婿なる宗時ふ先駆させ其の小四郎義時。佐々木左郎兄弟四人土肥土屋岡崎佐奈田與一懐浦平權頭を始として家子郎等剛勇ノ人十六騎にて八牧の館ふ我と向ひける佐賀時政を呼返して軍の勝敗をいとく多くさ時政ふて御方勝軍ふば城ふ火をうけやべしふ員軍ふく対くふ敵ふ使を進めべし静ふ陣自害とも捨て出ふるふ小象軍兵抜指麥しふ不ふ押ふ攻戦ふ源氏の方ふ加藤景廉ふ進ふ着ふ欲の剛武者ふれて堅楯を盡ふ責戦て遂ふ八牧判官兼隆ふ負をて後時政あれと見ふく高名ゆしく神妙ふくと感しふり軍兵ふ伝せふく城門ふ火を放せふく北条ふて兼隆が首波見ふく

法華經の序品をぐてふを忘れぬ身ふ八牧が家波ふ焼ふき

景廉ふ長刀ふ八牧ふ首を指貫ふ高ふふ指上ふ兼ふうりふれを佐殿ふ奉ふ謀叛の門出ふふと我ふ思ふふ同八月廿二日迅國の平家を亡さんふく長狹佐賀北条佐々木成先鋒ふて伊豆相模二列の軍勢三百餘騎波引具して石橋山ふ陣をとる平軍ふ大場三郎景親ふ武蔵相模の勢と清ひ江ふ向ふ大將軍とふく三ふ餘騎ふく石橋城ふ押寄ふ八幡ふ浅茅ふ隔ふく海を渡ふふく陣を取其の日も早西山ふ傾く既ふ暮ふ今夜猶も二郎重成進ふく日も既ふ暮ぬ夜軍ふ欲ふ方見ふがたし去ふ明日波朝ふ合ふふと約ふへと申れた大場あれを安ふくゆゆく明日波相待ふ敵ふ大勢付重ふてたやすく攻落ふ波ふふ三浦の一党馳ふふ両方波衆人ふ中ゆしき大事ふ道接して足ふ急ふ城ふれて小勢ふふふまる時佐賀波退散して明日ふ一向三浦ふ向ふく勝負ふべきと申れ儀然ふべふふ三ふ餘騎奪ふ弱ふく國波俗る佐賀も同時ふ関を命ふく鳴矢波射通ふれを山神ふ善ふく敬ふ時方も大勢ふ我ふ聞ふれ大場進ふく弓杖を突纏ぬんぬ立上ふく相平家ふ植武帝北御苗裔代々將軍の宣旨蒙ふて天下の逆乱を鎮海内の賊徒を随ふ武勇他家ふ猛れ弓箭の誉れ尚家ふ絶ふ船中ふ政入道反保元平治の凶賊を鎮定せふより

以来公家の重臣として其身を政の臣に昇せ子孫の兼官兼職をおひ一族国を重
人〻に氏族の栄を誇ふ依て南海西海の輩に至る迄甚威に従ふ東国の邦の民何
そ怨嗟せざるあらんや今たゞすくも平家の御代を傾けんとの企数悪しくい幡磨の
介をとりつく輦車に向ふ所〻名乗くと我こそ源氏の名を汚さじとや
我恐き清和天皇の皇子貞純王の御子六孫王より七代の苗裔八幡殿四代の御孫義家
佐殿なり〻〻憤恐無人の京親を申成頼尾張の平家の悪行身に餘て朝威を蔑ろ
依て早かの一門を追討して逆鱗を休むべきよう〻太上法皇の院宣被下されり卿の袋
小路に御旗を挿て出師の用意をなし〻〻されば佐殿は大将軍に平家を滅し分け朝
家の賊徒と綸言の上に珠数時刻をめぐらし左りとばかの家は堂類家人を遣はして追討せ
しめく後花洛に上る逆臣を誅罰せ度べし景親は平氏の故八幡殿奥州の奥任
宗任被攻れしとう以来東国の密代々相続く維人君の御家人はあるさう京親も
父祖相傳の者と馬に乗ぬ子細をは奇特なり後勤兼く顧ざるべきう下馬して
参しやべし御伴申る時政父子二人も酒匂佐木本三郎定綱兄弟四人加藤太光員兄弟

澤六郎。近藤七郎。新田七郎父子。城平太小仲太公義介父子。土肥次郎父子新開荒太郎
土屋三郎。岡崎四郎其子與一懐澤豊田次郎等其外の人〻国〻より院宣に依て平数
書に従て夜を日に継く馳参る王事靡盬八虎の函洗に猶く後悔まる迷に甲冑脱て武
命に参じ大場重てかけるを八幡殿の後三年の軍の御伴して出羽国仙北の金
澤城攻らく時十六歳にて先陣を懸り右の眼武射さるく苦の矢を射て其の敵と
討死く甲冑甚場に施し名武後代に留し鎌倉権五郎景政が未葉大場三郎
景親之将軍さして兄弟親類已下三千騎ばかられ洛どの大事故之の立ひ〻ら勢の
ひさも軽ぶられ寒に推うに従ひ参べき共足早に義経人命を助りさんせう
小条又かけるに京親の先祖に奥に都ろりいるに平に公と三代相傳の君
に歌しやべ我と遠国に二君に仕じ甚に十番の帝王に奥ひなり院宣被蹴に背け
弓矢を放ち人半冥加の程蒼惶し勅命被背ぬ者の志親を歩がかしといふや言
ろく垂益の事に唯急き命れとに大場帝て先祖に実に主君なり祖背に背
命に今恩に之に深氏を朝敵に被ぬ者人の恩所に〻家人の忠返

も佐々木の外に景親も平家の御恩を蒙る事海山のかし恩をしらざるは木石なり
何ぞ世に名を顧く今は恩を忘るべき勇士は禍が如しせいは事なりとも今退落
申べきとそて三度辞せしかれども勇なる小臣又申けるは欲を身を失ふといへり佐々
木兄弟は大場の詞を一国の恩に就て重代の主を捨んとや弓矢とる身も言一つも輒く生て
も死ても名を恥る者なれば景親は権五郎景政が末葉なり先祖の首に血を
あやせ欲を得る者也不当なれと云なれ共敵も味方も道理なれば一度にどつと笑
ひける兵衛佐殿の仰に武蔵相模に聞ゆる者共皆みな在と覚ゆ其中にも大場俣
野兄弟は先陣とこそへりあれらに跡をとらすべきと宣へば岡崎四郎義真申けるは
弓矢を取て戦場に赴く者敵を人に組ぬ者や侍るべき親の身として子の命を顧
ざるに似たれども存ずる所を申さげんも遅く又私あるに似たるべし義真も既に嫡太郎
の不肖仕候へ共未だ力ありまや侍らぬ心ざし是族中に弓箭取て是等倫に劣べからず
其器に侍ては仰付らるべき旨申上ければ兵衛佐宣ひけるは趙武挙以私讐薦以己
子をとるを忠有く私無きは或は敵を挙し或は子を薦む事皆合義合法遂に義
貞が名をくだり与一其日の装束には青地錦の直垂に赤縅の鎧白星の甲の緒しめ金物打
たると着て妻黒の矢負長覆輪の剣を帯なり折烏帽子引立て弓を平め跪て将軍
の前に平伏せり白葦毛なる馬に引せたる其体あたりを払て見えたる今日の撰に
預る疑ひもなしと見えし兵衛佐殿佐奈田義貞に宣ひけるは大場俣野も名ある奴原
なり今日の軍の先陣仕てかれら二人が間に組であれ源氏の軍始ならん高名せよとぞ
厳命ありけるおもむきもしたりけれ

佐奈田俣野組討

佐奈田与一命を蒙て御前を立たる所に文三家安といふ者は与一が乳母子にて義
貞が母又子共が母にも語べしとて云けるは一騎打出しを最後と思ひ給ふべし兵衛佐
殿今度の軍の先陣勤よと直に仰られければ多くの人々中に撰出さるる事弓矢取身の
面目なれば命を限りに戦ひなれば生て再び帰らん事あるまじき覚悟と知給へ
何事も申置べきいはで其事今は力なし我討れぬと聞ならば母公女房の歎
あきて思ひ残しけれ共ひとつ亡つらも世の譏らん行き二人の稚者をはいかが

石橋山合戦

佐奈田俣野組討

人跡未山の奥に隠し置く佐殿世に立給人時先祖代々の国恩と佐殿に
申給ふ兄弟に対せて云ひ仰備を女房を子共の後見にとおり給仏に香花
進じて後世弔ひ給へ父是清殿も佐殿の御伴あれい軍に習生死を知る法性
何事ぞ思ひ切べき形まで申給へと云ふ燃ふ云伝ふべし又汝もおれ者共不便に思ふ世
あ〜べ憂の又世に形くべ情く義経が形見ともと云れば父三郎殿の二業
の時より家安親代と成く歌を胸に思ひ〜なく夜通労て畫は肩に世の世経日に育て
まして早成人し給ひて人に勝れ給人事を頼ひ兄五郎家に成ひ〜ば行の心に
義経の矢的草鹿也と兵射ぬ〜馬に乗ぬ〜ひて〜ひ〜も兵駆きとそ〜へ
まして生立給ひぬ殿きとしに世に家安は五十七に成ぬ〜れ〜に〜に生命〜く
先陣を蒐く死人と宮に面紙に捨く家安が生残くは何に世人又人のいく人事を
祖〜に〜れ佐殿田与一の最後に祝ふ義朗に身に添て文三家安の幾程の命を生
人〜くは最後の軍に立ん捨く逝くは〜〜人事も口惜死ぬは所の討死なり
右の事とは外の者に給れ〜〜して三郎殿と云童と拓〜く中合遣り与一

既に打出れば佐殿義経奥に義朗早に見ぬ者聞よ〜と宣へ与一弓矢を
仮の時振舞軍場に立ち事作時〜を佐所に侍りとて十五騎の勢を相具して進出く
の義に事は三浦惡四郎今岡崎四郎義真甚嫡子に佐奈田與三義重生年廿五わ事を
思ひ人〜を組やくこて喚り弓を海右に山岡さ〜に而を左に水隙道を抜〜馬
に乗せて抜駆行や清平家の方より聞与一与に歌を〜を〜とて進者共に大場三郎景
親俣野五郎景尚長尾新五同新六〜木下五郎漢場五郎荻野五郎曽我三郎原宗
四郎渋谷庄司瀧口三郎稲毛三郎久下権頭滝間三郎廣瀬七郎岡部六弥太高祖左衛
然者邪郎等と先〜て究竟の兵七十三騎佐奈田も人に組人と我先〜に〜
さを闘さ〜に〜に道に抜〜馬次第に〜〜る廿三日の黄昏時の事なれば敵も味
方も〜人〜わ〜に与一を文三を伴人で家安藤に聞ひれ相〜ば〜〜大場俣野に間に組人
と〜に〜組組に〜に義合〜く歌の頸を〜れ武間の弓に力あ〜〜れば悪て〜我と〜
文三雅もさ義存〜佐人殿の大場に組ぬ〜家安に俣野又我大場に組作〜を

俣野が組敷くと見て進む所が岡部孫次郎與一が組んと志く鹿毛なる馬に跨がる手も
聞ゆる武者とひあ波大場兄俣野とひとしひ馳ろうて甲のて角へ入くと敷の花瓣が引
付て頸を搔とり雲透がうれぬと思ふ歟中れわれ汝と思ふ歟孫次郎と兄弟悲やか鹿毛石
の狸くれ共半ばあわ〜が奉くあわ〜が義貞が討るるとて肩を比谷へ捨て抛入る與一が騎う馬八角
葦毛と連れ立て出すが鎧りて裏のされ鎧の花乃如く白ひうれを名をば乃鎧とあ波く東國一の
強馬之名に蒲冬の拜が有るが鎧が強く輒乗者もれがりけると思ふ所をして駈るが丈
も達退〜煩なりけるが無一計で騎隨なるされども岡部持和げて三浦へ逃〜ひまの中の
極へ引をたりとそ都逃うと名ばあうう作家田拵郎駈ずくて又元逃〜ひまの殺曼へ出
うとそ奮ども馬乃毛に乗れ馬と馬くれを己が力をたのもは〜生雲唐の左あるが子孫二
筋とり合て殺奉うるる孫次郎が頸切る時猛武者の身の為が鎧が強て はつと出て走
れ〜あわを引止んくと志れども武馬の癖とて口をば主が打れく脚が芝る馬く
乃者止んと引行が子細三ツが切れを左右の水付を人うう武蔵を又引り行く仏の
作が引くり切大場三郎い兄の俣野五郎が與一が組の人親も同が奉〜が組ん

ぶる我をとるが俣野を鎧が晴て敵も味方も見人わ〜ぶ與一が猛が蒙金物が奉く特が奉〜見
馬の毛も白ひうれ其を人白れ縄をかけくうはれが験うはを俣野も歩を出るが与一を馬が
引まとく迎付うう俣野敵れとを尚とひれて作家田與一を我貞と名家組んぶと喚
乃者無下が逃ひうれを義貞とて が奉あう向を維俣野五郎景尚と名乗を逆と押敵て
馬の頭へ蒙重る上が成下が成駅返〜持逃〜山の組成下が大道まて四陸斗巻て
抜ひうう今一返〜狂ひ蒙ひ互が海へ入れ俣野を大力と聞が言うう人下が推分れ
うう蒙〜が郎頸を下が足ひて不起んくと志けれども俣野が力や劣れ與一をう人が
引とと乗浮く義貞敵縄を切うう為重れくと浮れども家安と為て郎
蒙ども抑隔られく作者を人を形し俣野今が叫ひくと奉く景尚作家田が
組うう作けやくと叫ぶ聲が長尾新五其聲が作く為合て上を敵下を敵と與一を上が
乗形うう角ひを長尾屋敷上ぞ景尚下ぞ與一を課〜形ふとひ俣野下ぞて上を與一下を
景尚報まかとひ頸を一所が有り聞さは聞し音を息突く分明が聞分ぞ〜上を下を
輪ト成れ思ひ俺て我を立うう俣野冗不覚の人や聲が奉も聞和が人猛の毛波も搜後人

かゝりしに長尾實にとゞまりて澁をぬき授けるに與一あらがはずといふて右の足を揚て長尾が
むかふ胸を蹴たれば三段斗むかふへ倒れたり其間に與一刀を抜て俣野が頸をかけざまに切れども
利どもなく透ければ與一刀を雲透に見れば鞘ながら抜てありけり鞘尻をもつて抜んとせられたり
運の極の悲しさは岡部弥次郎が首切りし刀を拭はで鞘にさしたれば血汐張て抜ざりけり
長尾新五が弟の新六来つて落合ひ與一が胡籙の間にむずと乗得て甲の鉢に手をかけ引さげ
御て頸をかく無慙やといふも疎く俣野を引起していふやう手や負たる首か問ば首も重く
覚ゆれといふあれを援ければなまくと去りけり手負ねとて與一が刀とられて鞘尻一寸より砕
その後強く指えしとえたり其後俣野は軍はせり佐奈田與一も俣野五郎に討れたりと云ふ
されば源氏方は勝れり平家の方はあれを流れり文三家安は大勢に推隔られ主の與一が討
まてるをもしらず一所にていかにも成んと主を尋て走めぐりけれども敵は山に満くなり尾を
下隔てり死生の所去しらず秩父の一門に稲毛三郎が手に宮ふて戦けり重成申けるは主をば
文三己が主と憑ける與一は討れぬ今は誰をか期すべき逃よ助けんといふ文三申ける稲毛殿
安を幼少より軍には籠組をばせず事は思ひされども逃隠ると事はいまだ存ぜず主討せて
逃んは御辺の郎等とは何にかくしぞ申さる殿の言かな與一殿討せぬ人はまた聞ぬ後迄
誰ゆへ身を惜ば勝べき逃よし宣ふ所の押並て組落んとて進むれば稲毛が郎等押隔て
残りけり家安分捕八人して其身も死にけり是ぞ若者と聞くぬ若代に残りけるなる岡崎四郎義實
佐奈田與一冠者をも討れ追ひ付けるに時にして其身も元来は入道の若者をかと痛く
與一が後世を吊らしと泣れたりし其子の嫉妬の五人十人の子をば失ひ侍るとても君のため
御世に立給ふぞそれ迄の幸にて不惜と心強くいはれけれども流石恩愛の道なれば涙の袖をぞ
絞りける與一家安討れて後は源平互に入替て戦ひける軍兵ども疲れて敵は大
勢なれば平家を討ちつゝ早飛方に佐奈田が勢は土肥次郎に落合て新手の三浦の衆と
もたらひ引とも敵に矢一ツ射ず落人とぞ後陣にさがり返合せんとて下知し給へども
三浦の衆は田次郎義久加藤次郎景廉三浦の衆と小坪といふ所に下り寒て散々に戦ひ敵は数十騎に
なれども道にて二騎三騎づゝ寄集て引張て射るるに大将
なれば義久人景廉引退きける

公藤介切腹引楚効莉保騎

公孫義光を
肥をそれハまふ
渡り手
叶ハ子息の
特井丈年 秋光ハ
戦われ巌石を
仕ふさ中し
腹切さ悪ッ義を
全ッ

八月廿四日辰刻ばかりに兵衛佐殿上の椙山へ引ゆく萩野五郎季重兄弟子息五騎ばかりにて追懸まゐり
申あはせ先ず落ぬかの大将軍をまゐらせ奉べかりけるを源氏の名折ぬべかりけれども唯一人留て一の矢を射
源氏の名折ぬべかりけれども唯一人留て一の矢を射
射給へば萩野が五騎ばかりにて草摺縫さる小射込れたり二の矢ぬ鞍の橋輪を馬の脊かぶて射通
給ふ馬頭ふらねばかぶ萩野馬ふり落ふりたる三の矢ぬ弓を射出して馬の胸帯を射させて落ぬ馬
もたまられも足掻にしてそたりたれ伊豆國住人宇佐比三郎助成馳参りて兵衛佐殿の鞍ぬ橋
塞く背ふる大将軍の戰ぬ先ぬ疲ぬ引ぬくと陸奥守殿ぬ射着のたまれべし宜ぬ時相模國住人
飯田三郎家能馳参りたる紀藤三ぬ射ぬひたる給へ軍兵ぬ山ぬ踏ぬ
一番ぬとうなれば鎧ぬ上ぬ刀ぬかり佩て馬ぬ上ぬ伊豆國住人澤六郎宗家ぬ
討ぬ武國住人公孫成光ぬ本肥ぬ
成光体ぬ
賞ぬ
助ぬ親光ぬ恩愛ぬ名誉ぬ
文角しけれ更ぬ延引ぬ公孫分ぬ成れ親光ぬ我ぬ射ぬ父ぬ廿二人ぬかりぬ甲
要形ぬと云れん事無疑ぬ心憂ぬ思べし敵ぬ近附ぬ兵ぬ我頸ぬ切ぬ孝義
せぬ全逆罪ぬ成ぬ無ぬ云れぬ父ぬ命ぬ事逆罪ぬ作ぬ
ぬ左右形ぬ刀ぬ抜ぬ父ぬ頸ぬ害ぬ孝ぬ母ぬ橋ぬ
本文ぬ昔唐土ぬ楚劉ぬ
寡形ぬ母ぬ
けぬ園内ぬ深塾ぬ楚劉母ぬ
めぬ橋ぬ
家ぬ貧ぬ飢饉ぬ年ぬ
盗取ぬ父ぬ
盛ぬ先達ぬ父ぬ
捕ぬ荊保ぬ父ぬ

時の人称して孝行の子と云ひ公義にも甲斐なき旅に死れく恥辱見くるを疾
如き事云はれども父が命に背くるを孝者の子に非ずあるべからざれども恩愛の今成絶人
事の悲しさ堪難く嘆じ給ふ間に歳光を腰極めて卧ふり田代冠者信綱を義光
おん孫と心得ふ身達を祖父が自害に見せんと云ふ者申さ落して其者を義
孫へそこの特所五郎に與へ給ひ親光曽の神に引張して法々山に登り北条次郎宗時
新田次郎恩後馬の鼻を返して戦ふる所に甲斐国住人平井冠者義直と伊豆国住人
新田次郎恩後と馳並べて組で落指違へて戦ふ北条次郎宗時を波打際に歩せ
落ふる所伊豆五郎助久保並べて組で落ふけると両虎相戦へて互に命死亡と名を
発ふれ兵藤佐殿に当ても延命ふ所に大場二郎 京親佐々木五郎 義清等
大勢にて先陣に進く追懸ふる佐々木義清に大場二郎の妹聟ふ所を京親に勢ふ
打具しふる緒白馬に赤皮縅の鎧を着ていちはやく駆見へ見へ所兄の四郎高綱に
い義清懸ふ所に父の秀義に為ふ義を為ふ所なりて清ふ孫の今
はぐも憑たのまれる依々兄弟四人御方にあり汝一人門を引分て思懸ふ大場

屈強にて弟に引人に引ふ佐々木四郎高綱矢面
是非の返事はせざりける
高綱賜姓名落頼朝卿
兵藤佐殿又射殺に引ふ兄弟に番ひ脇に引人に引ふ佐々木四郎高綱矢面
ふ塞ぎて大将軍と云人の左右に弓弦引矢弦放の有様如法清伸の者共を
あんず狩を狩々数年ある所に郎等に疾々落のび給へ高綱兄弟清
近侍を防矢仕へ給へ仮姓名弦給へと云られて佐々木の細ふ及ぶ暫る綱ふ頼ひ
申宣へい佐々木姓名弦給へ弓矢取に番ひ返弦飛ふ向ふ大青揚く名を
くるい清和天皇の第六の皇子貞純王の苗裔八幡太郎義家五代の孫左馬頭義
朝の三男弟右兵藤権佐頼朝と云ふ東国の奴原に先祖重代の家人等馬ふ
駆ぶ同道く乗る乗猶鞭べ奇怪と云ふ退事と云ひけく暫ふ待て然と馬を乗り射る
る先陣に進る大場ふ童馬の左腹を射通して扇風を倒す如く馬い山の細
道ふ横ふ倒ふたをれふに幸い馬ふ敷きてふり道狭られば乗越進く上るこのか

佐々木高綱
頼朝卿の継名を
給わって平軍
大場が追ふを
射伏る

馬をこうのけ童城起人とまる彼を佐藤遠平来て大場通まを者共こそあてとうをを
定綱高綱兄弟逃〳〵合て散々に防戦ふ夫程に高綱兄弟太刀を抜逆さまに
せく七箇度まで切てられば大場が大勢佐藤兄弟に同ふ深手を負て籠ぬ高綱
跡に残り兄弟が暇遠きうられば佐藤の作法に陸奥忠節おもむく通れかくれ命ばかり全せう世武
討とるふ新くい必ず命を合給ふ者しるを作法古人いふ事有敵さうる兵の再戦ふを
ば三人高千と云ふ何況乎佐々木殿わく七箇度の戦ひ敵ふ〳〵うをれを世静て七箇
度の忠を感じて備前安芸周防周防備前出雲日向七箇国を賜ふる漢紀信ち
むうと云ふ〳〵高綱も姓名を絶て敵遠〳〵佐藤を延〳〵まるれを死〳〵名誉さ〳〵
あれば生く恩ふ頼ふ異国を朝と云れども倒を貴ふ〳〵者

頼朝卿隠卧木助梶原佐殿

兵衛佐殿を土肥杢山を撰ふ〳〵義時ふ体ふを土肥次郎実平北條四郎時政岡崎四郎
義真土肥弥太郎遠平懐嶋平権守景能藤九郎盛長以下の者桐御所ふ〳〵義ふ
を大場曽我案内者ふて三ふ作時ふ〳〵進ぶ〳〵ふ松山ふ〳〵門接ふ所ふ〳〵佐藤

べき振舞〳〵田代冠者信綱を大将軍ふ遣さんとて高さ本の人ふ〳〵引ふ〳〵散ふ駆
三ふ鞭騎田代ふ陽まて左右ふ〳〵山ふを入ぶ〳〵ふ甚陸ふ佐藤兄弟の岩屋ふ〳〵
傷を見ふ〳〵夜ふ七八人ふ程入ぶ〳〵ふ大勢ふる時本あ〳〵皆ふ佐藤ふ〳〵
去程ふ佐藤ふ者ども多ふ〳〵跡ふ残ふ〳〵集ふ〳〵ふ佐藤作ふ〳〵ふ大勢ふ〳〵大場曽我
案内者ふ〳〵山踏〳〵て相尋ふ〳〵大勢ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵
弱ふ〳〵〳〵と実ふ諸将ふて〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵
一所ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵
定ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵
今ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵
三敗の事ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵
叶ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵
ふ〳〵〳〵や言ふ〳〵て宣ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵
佐藤ふ相従ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵

三郎宗遠岡崎四郎義真藤九郎盛長これら佐殿の軍兵ちりぢりに成て臥木の天河
に隠れ入ける其日の御装束には赤地錦の直垂に緋縅の鎧着て臥木の端近く居給へる裾金物
には銀の蝶丸を繁くおくりたるを時に向ひてのたまはく其中に藤九郎盛長申けるは
御先祖伊豫守殿奥州の貞任宗任を攻らるゝ時官兵多く討れて落給ひしに纔に
七騎まで山籠しおはしけるが遂に逆賊を亡して四海を鎮めおはしける今日の御有様も昔に
準じ吉例とや申すべきと申ければ佐殿もいとたのもしく思して八幡宮を拝み心中に念じおはし
ける所に関代冠者とて手練の者にて佐殿今は遠く落延させ給ひぬらんと思ひけれど本より飛
入りて跡に同じく落給ひし間臥木の天河に入らせ給ひける大場曽我俣野梶原三千騎
山踏して木毎草の中に乱れ入りて尋ねけれども見えざりければ大場伏木の上に登りて
弓杖をはり踏ちからして佐殿出させ給へといひつゝはしるのを此所にて不審なるを
空虚に入て捜せよの声と下知しけるに大場が従弟に梶原平三景時進み出て弓を
小脇にさし刀に手をかけて伏木の中にはしり入り佐殿も景時と互に眼を見合せけり
佐殿は今は限りと思ひ景時が手に懸るよりもと思召しければ急ぎ自害あらんとし給ふ

ふかくあはれし給ひが景時同の者に降参すべき自害を思ひ止まりて腰刀に手をかけ給ふ
景時哀れに見奉りて暫く御待候へ助け奉るべし軍に勝ぬは公思召候か御身を
手に懸らせ給はば草の陰までも景時が子孫を守らせ給へと申も果ねに蜘蛛の糸さらりと
ひきかけ景時不思議や思ひ給ふなかの蜘の巣が弓の筈甲の鉢に引かけて伏木
の口へ出になりける佐殿掌を合せ景時が後影を拝して我世にあらば此恩を忘れじとの給ひ
さりとも七代までを守らんと其心中に拝まれける平三伏木の口に立塞て弓杖ついて
申けるは此中には蟻もなし蝙蝠多く騒飛出て土肥の真鶴が方を見られ
七八騎落武者の見えたり此所に一定佐殿と覚えたりあれを追ふべしと我も下知しける
大場見やりてかくの佐殿の其おはせんには我も此伏木の中に探し斧鉞をもて打砕
見るべしそれも時刻移りなば景親入て捜し見んとて伏木の中へ入らんとする
を平三立塞て太刀に手をかけて云けるは殿それ大場殿当時平家の御代と
源氏軍に負て落ぬ誰人か源氏の大将軍の頸取て平家の見参に入て世に誇らんと
思ふ者あるべき御身何ぞ不労して此所を捜されたる景時に不審かけて捜さんと

矢衾佐殿朝
石橋山合戦
伏木暮

宣ひて秘まそ二心ありと疑まんも無念なるべしかく甲の錦弓の弦に蜘の糸かゝるべしや
弓矢を捕も不義にあひ移りて生ても面目なし誰人にても捜されまじ此人にも推て
捜るゝ人あらば思ひ切て指違へ死なんと景時わらくりに云放せば大場も道に入ぬりけるが猶も
心にかゝりけん弓の筈を入てかきさぐりしと二三度弁撒さぐりければ佐殿の鎧の袖を探り
召れ涼しく八幡宮を祈念し給ひける験にや臥木の中より山鳩二羽飛出てはらはらと羽打
して出てけるに是を佐殿の内におはせんには鳩棲べしとも言ひ捨ども疑ひを不審なりけれ
ば斧鉞を取寄て碎て見んと云ける所に今しも晴たる大空俄に黒雲引覆ひ雷鳴
震鳴迴て大雨頻に降暴風さびしく吹て諸木を倒し霹靂して電鉄の如く光り雷
所々に落て巌石を碎き微塵にすれば諸軍勢騒ぎ立て絡て之まての所大雷一ツ落て
七八人しても動しがたき巌石臥木に立塞て其見えざれば雨止て後岩を碎き見るべしとぞ
大場も杉山の方へ引返してけるむかしも聖徳太子仏法を興さんとして守屋が為にあひ
たまふ無勢なりければ只一人逃させたまひて椋木の虚に隠れて命を全ふし守
屋の大連はまたげ申ふ又天武天皇も大友皇子に襲れ不破関にて既に敵追かけ
られまつり危くみえさせ給ひけるに倚まつる大木の梢二つにわれて天武帝を隠し後に王子を亡し
て天武位に即せ給ひまつりしも能く似べき瑞相にして此る伏木の虚にかくれさせ給ひしも末頼もしく
佐殿は二千餘騎が引退たる其隙に臥木を出させ給ひし小道をたどりて岩窟を
登て土肥の真鶴へ落ぬに雨をやみければ大場は馬を引ずていかさま臥木に潜し給ひ捜さんと
押寄口を塞ぐる天その後にて是まで落くる跡ありされども未だ虚の中にかあらん差されは
梶原景時が計ひにて落し給ふされども遠くも延給はで後は攻よと軍勢引具し退けり

頼朝蟄小道地蔵堂

去程に主従八人小道越に登て後を顧ば敵も間近く進まする其身の上に自害をさせ給はんとて
肥高れ所に上ってこれ堂一ツあり小道の地蔵堂とて寺あり八人堂に入てこれは法師を人
あり佛前に念珠して居たり土肥法師に向ひはこれは源氏大将軍兵衛佐殿とおはしまする
石橋山の軍敗て敵今追かけ来る方に所やある助まゐらすべし法師云ふ
源氏の大将軍しや此堂の人里遠して山深ければ閑ひの為に仏殿の下に穴を構て七八人
入ぬべき所に閑居せり皆く忍び入て御隠せて八人の殿原を押入て上に蓋して帰さ

小道弘地蔵堂の
住僧成さうくく
相勢の行方を
尋ねと搦問す
るなり

甚上ホ雑具沁面蔑げく我身を佛前に座ホ繰して長さう大場大蛇引裏して仏寺ホ入
中ける只今流人のかたひけるいたづらや吾や少再三こゝろも善ける者ホ大場ホ寄佛前
弧これを法師もくわうハうホ拾を同ホ入くもを死ぞやと責なれを悟のこゝれハ三箇年の間罪
ホ座係る者なり入定の折られを義ぶしと中ハ重く向義人の仏形と通ぶるを引ぶや
ふうしを死ぬ中ホ座係して侍ふハ外の聖耳ホ入ハ内仏ホ思慮かけ者ハ軍ハ知ぶと
善ふ宗親大ホ嘆く事ふるべき拷問せよとて軍兵堂の内ホ入く偽ハ捕く大ホ来引
出し拷ホかけく已午の時より申の時ぶ為りまで上内ホ推問まれを絶入年後ふ
死まれハ水ハふ死生かへまハ拷ホ上く責ホ稽ホ四五度ホ及人ぶ偽ホ責殺し此大場ホ
見くく不便くく法師を殺ホ忠ぶり名と非業の死を垂悠る是仏間ホ故を遠ホ為延
ぶ是を忠ふて上人を叱ホ打擲く真鶴ハ上て怠ホ居其日を賜ホ苦ふれを遠寺の徒も
ぶ死ふれども小堂ホ入ふ者ハ地獄と云て煙の下ふるひ中くふれを責殺されく為
に者ホ偽ふれ知見く頼朝ぶ命ホ代ふる者ホ不便ふれと勝の上ホ出ハの世く為滅しあひ
七人の者共を面々ホ神仏縁を名ホ偽理ホ為く法師上人の口ホ入れを喉閉く

又頼ホ上人ハ同ハ法師ハ為ふ者ホ備く大場ハ仏法死者と労若の体もこの
者ぶ将軍ぶ免ふ方も安穏ホ渡ふ世ホ入ハ同出ぶ是ふ為ホ為れを何事ぶ
有ぶ云ハ為ふ仏ホ云ハ偽ふ仏上人ぶ志ホ為ホ結あり頼朝世ホ出ぶ仏堂を造営し
今の報恩せん為ぶ仏ふ為ハ服中ふ云て偽ふ立ふ人を七人の士も足ふ成ふ中ハ名ハ
為りふ

大場馳早馬大政入道申宮寿

同年九月朔日大場三郎景親使者ふ波羅ふ参ふ平家の門馳集く注進の状を
披ホ云伊豆國流人兵衛佐頼朝院宣有と称ド忽謀叛を発し去る八月十七日の夜
俄ホ三十餘騎の勢を率く八牧ぶ館ホ押寄の和泉判官兼隆ふ謀殺し館ふ放火焼
亡し畢ぬ名定く國衙ふ注進せ同ふ死ハ廿三日城郭を尚ホ石橋山ホ構ハ三百餘
騎の凶賊を率しいの城ホ楯籠ふの由景親三千餘騎の軍兵ふ相従し廿三日午時
より寄ホ入るを攻撃ホ所ホ頼朝憑ぶ廿四日暁天ホの城を為退き汐方ぶ向ふ成ふ不
穴ふ塩埋れふ成ふも又武従ホ石ふ懐く水ホ入ふも巻説端ホ艇ホ其頸ふ入ハと

以ても滅亡せし系勿論なれども其下遺りし一門の人々たりとも不肖ぐ系親者
不勅賞の沙汰あり是を九月四日成邦ふ左政入道新院御所に参りて八源義朝父子
注皇の御歎ふく仕ひ〜を入道が謀計ふく亡し義朝の三男右兵衛佐頼朝を遠江国伊吹の
禁とう流出して[illegible]ける入道が徳母池禅尼が宥ふり停止国流し処ろ所
此度謀叛を企るよし大場が注進状の嵩のゆへ早追討の宣旨成下さるべきよし奏聞
新院おし笑せられ宣下の條安〜速ふ大将軍成敗〜べし誰ふ仰付べきと尋ひふ
入道答ふく郎右近衛権ふ将平維盛薩摩守忠度参河守知盛と中国慈官者を
指下されゆへ

頼朝卿催軍勢降参大場景親

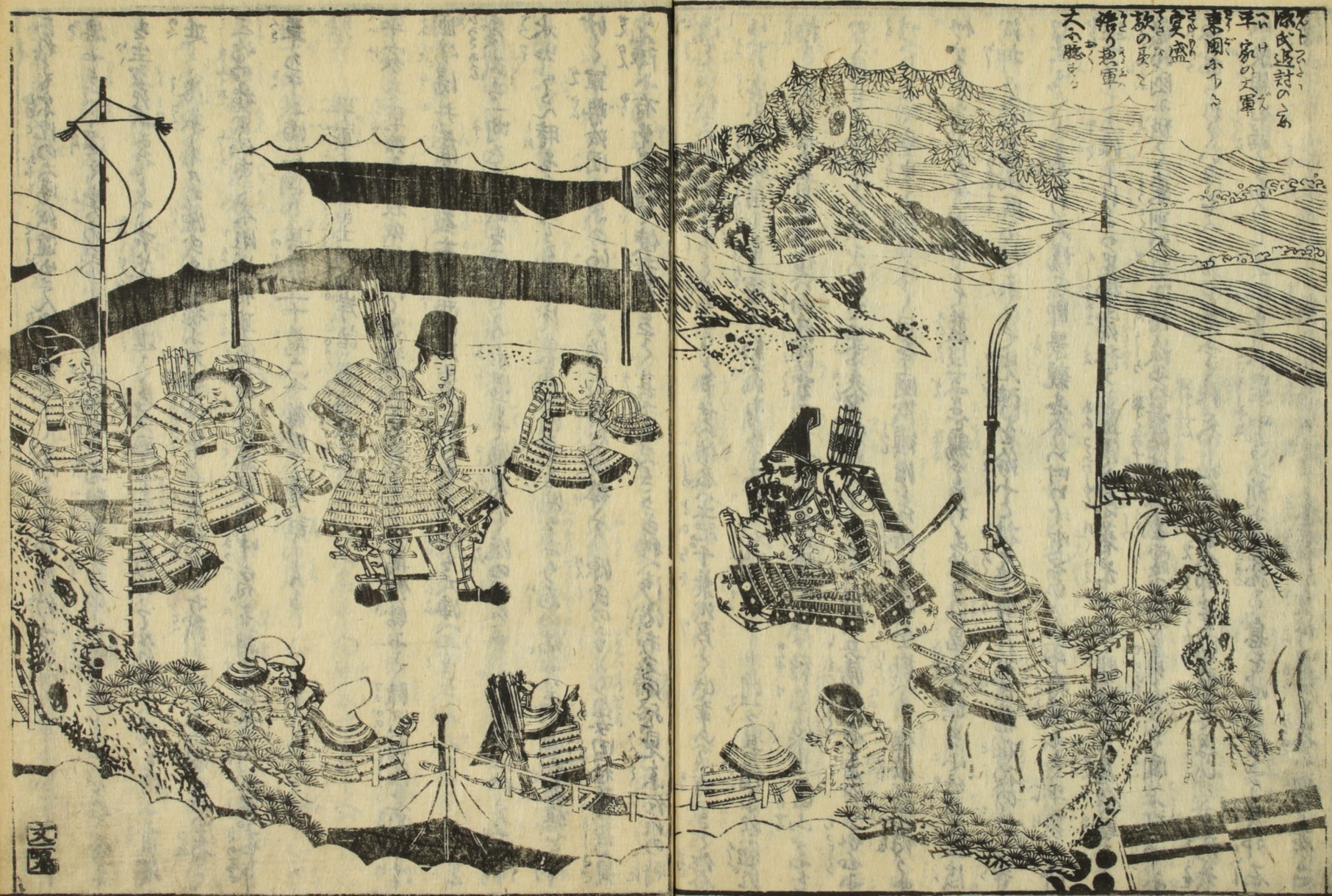
兵衛佐頼朝卿を所々合戦ふ勝利を得ふく勢強大之平家の軍兵東国へ下向のよし聞
ひひく武蔵国下総の境ふる隅田川原ふ陣をとふく国々此兵成ふ召ふ武蔵の
国住人江戸太郎葛西三郎一類眷属引率して佐殿ふ属せんと啓参ふ付ふ上総介広常
下上るふ此所ふ陣を張わん事疑ふ[illegible]ん其後ふ今度小松少将維盛大将軍ふ〜く

侍ふ上総介忠清等数万騎ふ率して下向と聞ふ斎藤別当真盛東国の者
定着ふく一陣を張る日数経るべ武蔵相模の勇士当大場畠山ふ下知ふ従ふく平家
方へ参るべ急ぎ川を渡して足柄ふ後ふ富士川を張ふ受く陣ふ成ふ武蔵
相模の者ども必ず参べ〜山西国の兵ども定ふ参べ日本国を靡ふ仕ふ
参べ〜上野下野の兵を追ふ参べ〜也計申されば参べ〜そ江戸葛西ふ仰て
注進を渡べ〜と下知せ〜ふ江戸葛西ふ石橋山ふ佐殿を射奉し事恐れ多く
けふ此仰蒙る事安堵の沢ふ武蔵国豊島の上総介ふ隅田川ふ橋を渡ふ陣を
取ふ其勢既ふ十万騎と称ふ注されうりかとされで東八箇国の大名小名別当所司
議按允ふ今ふ[illegible]ども[illegible]ふ二十騎三十騎五十騎百騎白旗を靡して[illegible]
集る事雲の如ふ[illegible]佐殿ふ[illegible]力勝くまが当国ふ所明神ふ御参詣して神馬成
引上矢を奉れうのふ所ふ畠山庄司重忠を半沢六郎成長ふ[illegible]佐殿の
参張大事成ふ[illegible]ふ八箇国の大名小名みの帰伏のよ参る[illegible]事
庄司俊兵の別当平家ふ当ふ恐ふ[illegible]坂ふく三浦と合戦もせ[illegible]

三位中將惟盛
忠度

あらいとなるべきせ[illegible]なれど平氏成清中けるに[illegible]兵平に清和源氏作へ平家に為時一旦の忠依為を相傳
四代の君と御系わ人に甚怨あるべしと[illegible]清逢来ひ[illegible]一定討る成先遣さるべし其案ゆしきこ
清六郎[illegible]義朝の系に[illegible]仲平も中間[illegible]長[illegible]ぬ[illegible]れて重忠生年十七衆容儀威肖
て猛く實に一方の大将軍と見へ[illegible]義朝の[illegible]成[illegible]く寵[illegible]父重能伯父
有重平家に奉公して当時在京東国の案内者として今度の討手もちろんされ
ば一門を引分まく父子故郷せんとそ[illegible]成に[illegible]成[illegible]中小坪坂[illegible]清方を射[illegible]
今将自猶成麗[illegible]所全頼朝の猶に相遠[illegible]ま[illegible]不審[illegible]仕れに[illegible]
中[illegible]小坪坂の合戦の事君の御為に不忠仕[illegible]再三問[illegible]の所不[illegible]の合戦
仕へ[illegible]二浦の人々御尋あ[illegible]明白又猶の事いま[illegible]私の継[illegible]あ[illegible]君の御先祖八幡
殿宣旨成業[illegible]せ[illegible]く武平家平成遍討の時重忠四代の祖父秩父十郎武綱初陣の時
武自猶成賜く先陣を勤武平を誅伐迫る御舎兄惡源太義館[illegible]く多古
先生為攻[illegible]時父の庄司重能又武御猶を上く攻為[illegible]ちまち[illegible]れば源氏の御落[illegible]
御祝の猶[illegible]て古例と名成[illegible]く代々相傳仕[illegible]れを君御代を[illegible]べ[illegible]御軍[illegible]は

御先祖代々の古例を考く[illegible]べ[illegible]成[illegible]土肥千葉成[illegible]く武平いで有[illegible]
は甚[illegible]時畠山重忠成御動氣[illegible]平不可之[illegible]中[illegible]所一々甚[illegible]
極く實[illegible]の者[illegible]く仕へ向後御方[illegible]て一方の大将軍とは[illegible]畠山[illegible]
かく罪[illegible]く我おいとて更[illegible]奏る者作[illegible]中上れば[illegible]成[illegible]
叶[illegible]て重忠[illegible]相[illegible]く日本国成鎮ほどの汝先陣を勤べ一個汝が猶[illegible]
仰[illegible]成押て盛[illegible]畠山が猶を小敗の盛[illegible]
成押る[illegible]畠山既[illegible]て先陣を給[illegible]被為有れば武蔵相模の[illegible]
[illegible]く[illegible]大場三郎景親を今に叶[illegible]三千騎[illegible]く平家の御
逆[illegible]て上洛[illegible]の足柄山成起く盛澤[illegible]甲斐源氏二萬騎[illegible]
駿河国に成く東国の勢成待後[illegible]清方雲霞の如く責上る中国[illegible]中[illegible]
取[illegible]れ[illegible]いで[illegible]と色と[illegible]く作天[illegible]れば家人[illegible]等憑[illegible]
成[illegible]親[illegible]弱[illegible]て[illegible]小星山[illegible]前に逆[illegible]く息を[illegible]長[illegible]石
橋山の軍に佐為成射[illegible]家[illegible]成迎く[illegible]重科の者を忽に斬る[illegible]


源氏追討の宣
平家の大軍
東國ふりふ
実盛
歌の長と
称り無軍
大ふ聽

あれども宗任の大場に遮出さんを不及人々て多くうへい出て作ら不及に軍ふ惣と云へし
惣士ちさく遅く業あるべし也沙汰有て馬鞍あと給ひく宿昇と浮ひ給れ金平
を生捕ふ武しして若先陣ふ進く出て勝人と忠ひ給りて是を大場を掠ふ首成
延ゝ陸奥しの源氏を加様ふ大勢拓集く足柄山を打越く伊豆の国府ふ着く
三浦の神成依ゝ木曽川宿車返富士の禁野原中宿支湖宿富士川の端ふ下
草の中ふ潜くこう甚勢二十萬六千餘騎と註しける

平軍寄富士川西岸。語に真盛歌美

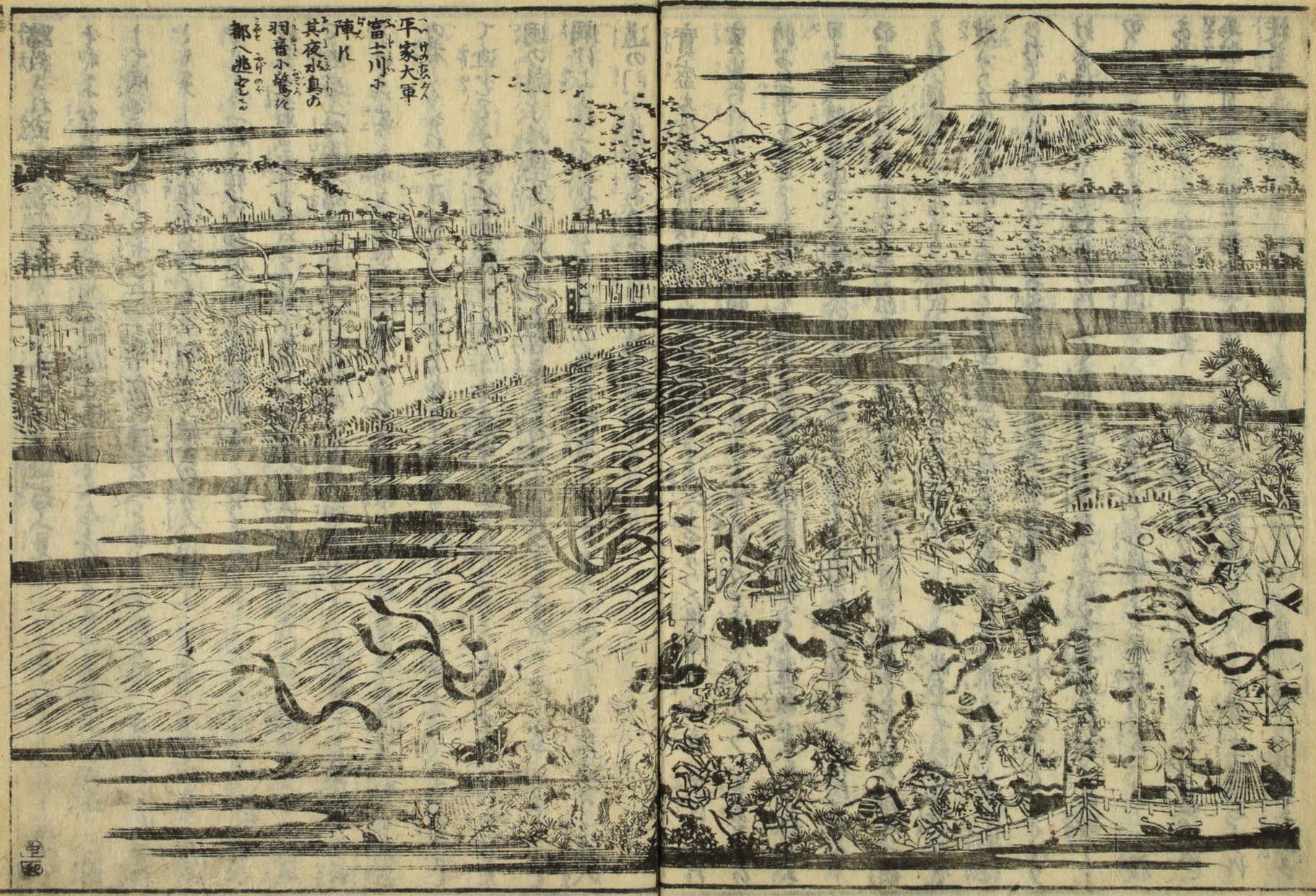
平家を東路ふ日数成経て路次の兵成昇して五萬餘騎ふく駿河国清見関沖洋
国清湯井蒲原富士川の西の端まで責寄て清を大海へ二里むうあとと河を
渡成を一町だろ成を二町だろ水濁て浪高し流の早成事矢成勢ふ似て而降
水出て人時を向ふべきふあ成東西の河原も測を方西の端ふ平家の赤旗と棒
げく軍勢成囲め東の河原ふ源氏の白旗成棒て方ふ源氏の方ふ安田冠者義貞
先陣ふ有を時を使者成を甚人多を成ふ時を使者成を甚人多を成ふ沙汰あるべ見来何れの時

ぞやと云ひ遣れども返事ふ及ばず空月数を経て平氏ふ多の難有と聞ふ物幕
引て人く帰を方る程ふ東国廣られを源氏の勢ふ怖く勢物思しく見西白旗
の風ふ吹て平いさで浪ふ人との様ふ有を有る権亮少将維盛を棄て別当成召て
拝頼朝の勢の中に已程の弓勢れ者幾多有ふ東国居住の者ふれば案内なて
知ら人と同ふ真盛なと成ふ成者と思召ふ馬を三人張五人張矢束を弓ふ物
平形ふ成十四束十五束ふて矢終早一矢ふく二三人を射成されば程を二領三
領をも射貫程ふて伝矢射る者ふ様の者大名を人の中ふ五人三十人ふ程ふ
無下の寒郷一所の手ふを二人三人を侍ふ馬ふ牧の内ふ乗ふ任く搦取剣られを車
走の曲進退の逸物を三人て五疋十匹牽せふ日の馬騎負せて朝夕鹿狩鳥猟を
して山林成家と云て駆習れを業ふ成れども落る平成ふ成坂東武者の習
ふく父ふ死ぬ成ふ引ぬ成ふ討れを成ふて親も退ぬ死歌の上成騎ふく死生を忘ふ
強ふ真盛なんど成ふ成れふて人ふ程物の数ふも非ぬ浮ふ成ふ事ふ成ふ盛肉近国の駆
武者ふ成れば親子負ふ成れふ平分ふく一門引ふ是て成ふ成ふ退ぬ成ふ討ふ成ふ命ふ成ふ

次て兄弟相具して落失の馬といふを給労馬の兎角法ろひ飼されば乗せどうこそ簡
をもかしと拾上げたしと早乗換して物の用に叶ひかつて東國の荒くれ馬に一番あてられば
更に乗上てべりたされを馬をいひ人とて西國の者共二十騎三十騎北東國の一騎に番作る
まる甚に御方の勢い五萬餘騎源氏を二十萬餘騎と聞なるひ間ト無こそ敵勢に及ば
ト況四分の一の大勢にかけ立てれ共かれらは國々の案内者北山を潜く知る所の御
方を西國の者く始て来る張あるを道をかりて是を覚来れ　されば東國の者ども
先祝さう張に塞く中に引を先戦ひ進ん人やいかをそんも道を出べきこひしき御大事
まる程に手をあらき武義相模の勢祝麗なひく御下向し後と再三御諫申れ
ども御用ひなく嫉妬する程今度の軍いかもそびくしのれとなるとナとる果しく
平家の軍兵を聞く臆病神法にく敗せしく兵書に云雑士沼して敵の英城
終せしむる事かうれしくあるいは事く實盛は不覚を雪ん為小國に討死しなば
けるかれ

平家滅る水鳥羽音逃登京都

實盛を儀に暇沼預ひ一千餘騎を引分く東へ上るの大將軍平維盛宗清と
実盛に付て上の四位弱いとられ共とも軍兵ト力と係人とそよしく実盛が
所の軍を見あらと云ひ上総介忠清を先陣に進ん事に浮世に源氏と
見ふ人時沼逆ふく雲霞の如く集るされども武門を行方ふ人をあ
ぶりれを見沼貴しく平家の方に宿をもり傾城遊女沼集く常に引ぞて夜
ふ沼酒盛して居ふ源氏を明日廿四日に合戦べしとて軍議あり夜衣無火を
焼ふ所に篝に火の流ふ如く沼五の景に見る平家の方ちと無火焼く敵を欺
られて名度へ人あり沼ふ我半ばあり沼家士沼ふ群集り居る水るいとうもかく所
けるに源氏の兵にも物具のけ甲ぬく音馬の嘶音ぞ沼ふ
明ふ沼ふ眠を覚し源氏迫ふ沼ふ闘沼進るべし　沼侍ふ沼ふ故の事に
ある者有られ平家い大將軍沼ふ　ふ沼ふ沼ふ沼ふ沼ふ沼ふ
馬鞍物具ふ恭駄兵振ふ至る間く打拾く周章驚のく馳走ふ親ふ沼ふ
徒者い主を顧沼ふ兵沼ふ沼ふ沼ふ沼ふ沼ふ沼ふ沼ふ沼ふ


平家大軍
富士川ヲ
陣ル
其夜水鳥の
羽音小驚ル
都へ逃セしこと

殺されぬ或は手足を折られて敵を法皇の御所へ迎へ奉り
されば不安憂のあるべしとて遠江源氏を南都へ
して興を引せ給へども寄られども平家の陣をうつ
ども多く石の不性をかん若京都もく源氏の方人
やんとの一行の頼政端政さく病脚の為を人あるまいのふと同へ武日頃よりあ
はるを好る者まで いさりけるをあり川渡へく後夜半討ふ武蔵原騒周章て
て逃奉一時馬ふ踏れくかく侍て其時い水島の羽音驚しく有はるやとて源氏の兵
やけるは寄も如者の海者今者を出るとも雖しり作るとも稀成故の声ひて乗亜
の者しるも知れぬ覆はれく逃てるとあく我矢の射手の使矢一つ射ぬを射ぬし
て逃出てるる可矢さ上ひ未尾しせ永中の上下安さまろるかりと月十日晋東
国の討手使空くのり上く古京西岩軍ふ向ひてを今成ぬ ふとも奉国ふを人を
聞ばとられるをいうしれ逃るを射者とて幸あるとそ人をを矢ひあるりへ政へ
道の門ふ筋書あり京良法師が強るるとや

冨士川の瀬く法皇あはるるとやを為平氏の
大政入道を被見のれを聞く安のはるはるへ
見く侍大将忠清を尾前成別よ我慎めはけ
義經来頼朝陣前詠大場已下
平家をく逃出るも源氏い成深追陣を取くおるるをふ年二十
餘う通白く勢小男の頼寛和うて威あく猛く胸ふ鞘畧と暁し八陣の軍法
を射張子房を左は諸葛亮を右ふるる人品郎等絶七騎相具して陣前ふ出来
て名乗るは是を故左馬頭殿の子息九條曹子常盤腹ふ牛若丸とや侍るしが
後ふ遮那王して京都北山鞍馬寺ふあるし世の中住倦く奥州ふ落下るく
男ふあう九郎冠者義經也中者也て佐殿一院乃御使成参りあく平家追
討の被宣あるふとりく一門の我執を存じ御力成源ふ為ん夜を日ふ継く馳参と
しかはさせ給へ宣入れを兵衛佐殿聞も可成涙をとりくと流し早使ひ入へ
ていうるく頼朝勅勘成蒙りし身をれば者信叶ひがく此度平家追討の院宣

院下し給ひて後の他事なく甚營まで急ぎ給ひ[illegible]
[illegible]給ふ侍りしかば八幡殿三年の軍に勇の兵藤為義綱を折節帝王に奉仕給ふ兄弟
旬後の覺束なく御暇を給ひて院下に進べきよし奏聞しけるに御免なかりければ
陣家に絃袋掛けて逐ひ下して金澤館へ集向志ありしかども八幡殿特に恨給ひて故頼義
朝臣のおりて後しなかとも義覺あれとて流を流ひ給ひ今御免の例一しも遠流故
左馬頭殿と共に見まう進べきく互に神仏綾給へ大名も小名も皆鎧の神仏なりけり
兵藤佐殿は九郎義經殿を同道申て鎌倉へ帰へ先勸責あれとて遠江を安田三郎
に賜ふ駿河を是一條次郎に給ひ上総を千葉介に給ふ下総をも千葉介に給ふ甚外
奉公の忠ふよりも人望の多ふ随ひ給ひ國郡庄園を多配し給ひ給ひ給ひ罪科の家甚
はなはあるべしとて大場三郎景親弧介八郎頼[illegible]
庭へ特く参り兄の懐恨平權頭人をふかき人とこそ[illegible]
足利又太郎義康に切る俣野五郎を遣れ[illegible]
堂に萩殿の御未重を石橋山合戦の時源氏の名折ふいの歌を後を見せ給へ[illegible]

給へくとやなりしかの人裸にして引張斬に我を忘り給て舎弟武人子息も人も[illegible]
尚瀧口三郎同四郎は廻文の時富士の山と尺くへ猫の額の物弧嵐の[illegible]悪口し
給しかの大庭に引出されく荷弧討れ給ひ[illegible]
兵藤佐殿は運弧東海に向き天下を掌握し給ふ事は神仏の霊相特に八幡宮の御
利生なり都へ上る事は輙ひ給ふ[illegible]東に勸請あれとて孫倉鶴岡を明く若宮
弧遥堂に[illegible]しく霊神を祭ひ給ふ社檀に金弧鏤め樓門に銀を敷給ひ排の端[illegible]
懸櫂き翠の松風千秋風に祭禮四時に御[illegible]
坊給ふ昌一供僧神主源氏長久武運栄昌の祈禱の神給神[illegible]
の霊地と成給ふ八道相國の[illegible]

平將重衡燒南都兩大寺

南都の大衆蜂起發動して静を泛清盛入道を平氏の宇乃糟糠と武家を恥て
塵芥とおく大政入道弧惡を理く摂録の[illegible]
寺の公卿殿上人十が八九を藤氏にして春日大明神の姓人代々の國母多くは武家より

如内人の皇王ゆゑ臣公とゝひ我朝の政事専武氏ゆゑ在ゆゑ小平家世と取く萬
乗の世勢成妨ちう諸卿の理政を怠おそれを國の危春日大明神衆流ゆ入給ふ給ふく
かく騒動ちうあやあんいゆゑ為ゆゑ南都の衆徒平家の滅ゆゑ細あんとゝ行
ゆ廿六日ゆ院人頼平重衡朝臣大将軍ゝて東山ゆしく知法あり其勢三萬餘騎南
都成攻ゝ世被霊あり大衆ゆゑ成国く東大寺の大殿ゆし蜂起騒動ゝて大和山城
の悪黨在野十津川の者共成招集く奈良坂般若路の二道成伐塞ゆゝ所ゝ
を逆管植く在く所ゆゑ城郭を四面く逆茂本成引掩掘をゆゑ老廿甲冑と着し
弓箭と帯ゝて相待ゆゑ廿八日重衡三萬餘騎ゝ奈良坂般若路ちう推寄
く時成進る大衆用意の事ゆゑ聞を合せく散々ゆ防戦ゆゑ平家の大勢法く
責ちうゆゑ衆徒ら世紀ゆゑて引退く軍兵勝ゆ乗く二道成打懸く寺中ゆ乱入
あゆゝ寺元焼ちうゆゑ猛ゆ攻国住人福井庄下司法郎左夫後方とゝ者重衡
朝臣の下ゆゑ付く植成破く續松ゝて頃野左家ちう火を付ちう所を世自然
の事ゆゑ折長乾の風烈ゝて黒煙寺内ゆ充満ひ大衆猛火ゆ責れ焼ゆ間

ゆゑ慌ゝて蜘の子成散ちゆゑ如く落ゆゆゑ成ゆ法印永覚とゝ悪僧ゆ長七人計あり
法師の骨ちゆゑ選ゆゑ剛ゆ身も怪ゝ打物立くゆ鬼神ゆを劣ゆとゝひちうつ
弓の矢継早く手階の門ちう打出く引塞く射ゆゑ矢ちうく雨ゆ矢倍ゆ立
ぬゆゑ長刀十文字ゆ持く敵の中ゆ打入く散々ゆ戦ゆゆゑ多く討ゆ同宿も
尚ゆ討ゆゑ我身も痛ゆ手おく負ゆゆゑ今ゆ為ゝて妻日の奥ゝ引退く
猛火盛ゆ覆ひゆゑ東大寺興福両寺の伽藍諸堂諸院一宇も殘ゆゆゑ瑜伽
唯識両部の法門因明内明一巻も免ゆゆゑ三論華厳の経釋大乗小乗ゆ聖
教悉焼ゆゆゑ我身を助ゆゝ世ゝ行ゆゆゑ大師先徳の秘佛と年来住持ゆ尊
ゆを亡ゆゆゑ悲ゝ哀月頃日頃長ゆ孔ゆゆゑ若や助ゆゆゑ山階ゆの
内成ゆゆゑ大佛殿ゆゆゑ搦成構く兒童老傷女婦いとゝゆゆゑ手を打く上ゆゆゑ法れう
ゆる程ゆ猛火清堂ゆ取ゆゆゑ力しく下ゆゆゑ程ゆ階端折く下ゆゆゑ者い押敷ゝ上ゆゆゑ
ゆゆゑ言ゆゆゑ蘇重ゆゆゑ世ゆゆゑ悪つゆゆゑ長ゆゆゑ経ゆゆゑ乱ゆゆゑ法ゆゆゑ案ゆゆゑ何ゆゆゑ
何ゆゆゑ歎ゆゆゑ涙ゆゆゑ袖ゆゆゑ絞ゆゆゑ助ゆゆゑ為ゆゆゑ為ゆゆゑ日ゆゆゑ

南都合戦重衡軍配
東大寺炎上

文鳴

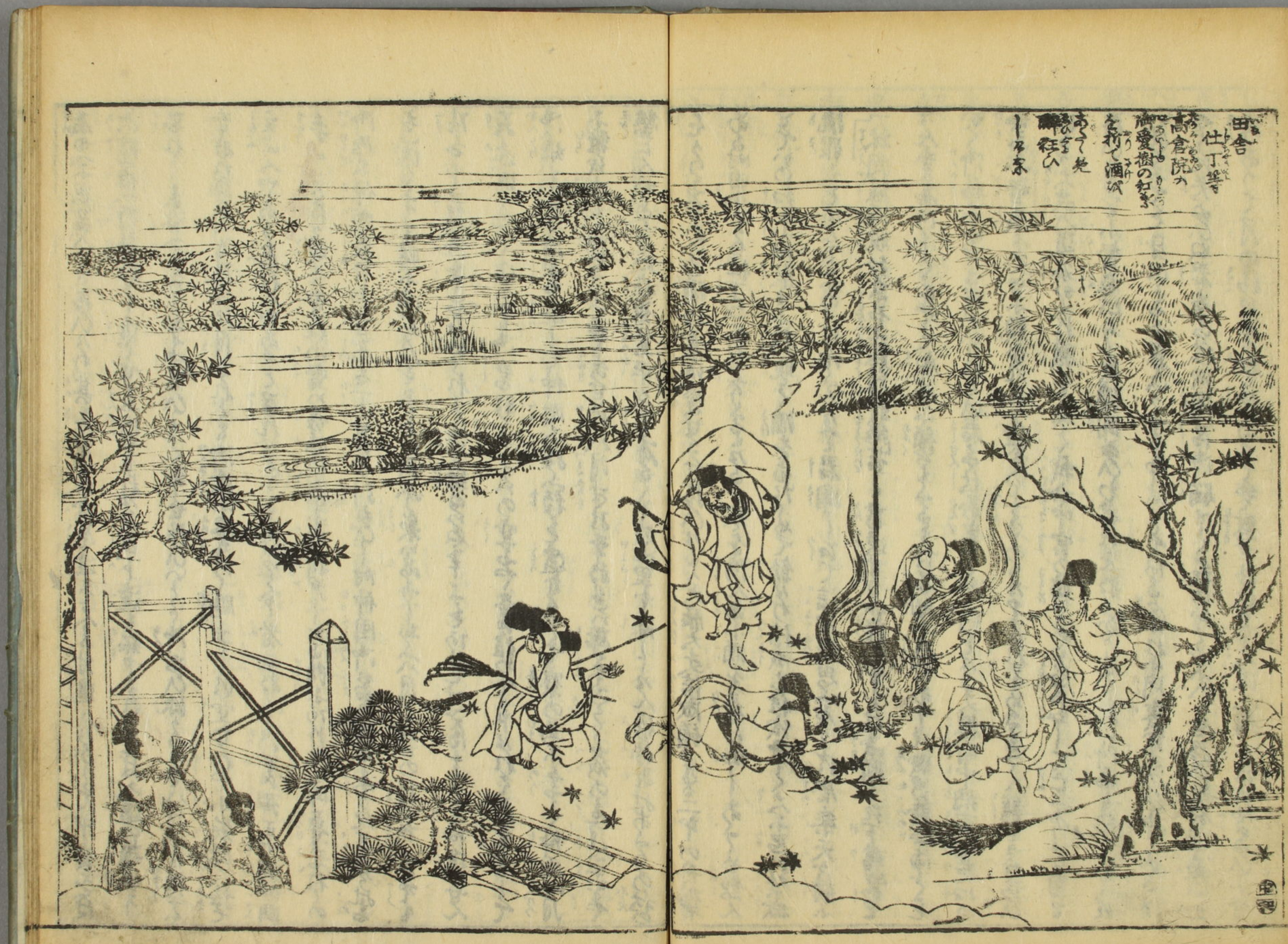
世一の如意輪観音無双の大堂なれば世ぞ[illegible]
悲しさ思ひ切なく孤露の者もあれども[illegible]
尽さん大の燃逆付ふ法いく雲叫ぶ[illegible]
呼喚の罪人もかくやと云ふべき餓鬼の[illegible]
を大海ふ呑人さく命終て人貴賤の孤獨七佛の煙ふ[illegible]
悲しとても跡く興福寺いも統治海公の御願藤原累代の氏寺なり　初は大織冠山階ふ
山階ふ営ひ山階寺也名付けられし後天武帝の御時大和国高市郡ふ移さるる
元明帝の御宇に添上郡春日の地ふ移さるるく興福寺と称ふ法相太宗の教弘
通せり代々れ王臣国母の御願寺　東大寺とかい良辨僧正聖武の祈誓あり聖
武天皇伊勢正を帰依ひ行基菩薩ふ勅ありて伊勢を神宮新造ひけ[illegible]
御祈宣ふ實相真如の日輪を生死長夜の闇を照し奉る常住の月輪無明煩悩
の雲残掃ふ我難遇ふ大願ふ遇て聖皇大佛殿建立ある[illegible]
壹の海ふ喚び注く試由を奏し[illegible]

天佛殿造営建立ひ[illegible]加護の霊場成一時ふ灰燼ふ[illegible]
なる[illegible]
武百人錢場ふ[illegible]
法義寺[illegible]
南都の両寺焼亡し[illegible]
[illegible]
[illegible]

東大寺大勧進刹髪小督局

治承四年十二月山門の奏状ふ[illegible]
養和元年ふ[illegible]
臣[illegible]
上人を戒徳天ふ[illegible]
[illegible]

よし仰下されけるは法然房院宣の御返事申されけるは源空山門の交衆を止て林
泉の幽居を卜る事偏に念佛修行の為なり大勧進の職に於て定て劇務の端なるべく
自行成就いさゝかさまたげ候はんと辞し申されけり重ねる院宣ありて門流の中に器量の仁あらや
挙し申べしと仰下されば法然房とかく案じて上醍醐におはしける俊乗房重源を撰み
出し院宣の趣申含められければ左右なく領掌し給ひけり則ち推挙し申されけ
れば俊乗房に院宣を給ひて大勧進の上人に定めける後俊乗房院宣を帯して法然
房へ来りてかくと申されければ喜び給ひて相携へて御房は何を論ぜず一大事の往生
を遂るべきとは勧進成就あらば御房をも一定権者とし申されけるが事なく遂
させ給ひければ勧進俊乗房年行隆昔に直人にあらじと人首を傾けり新院
御所にて母の孔を歎思召けるに南都園城の回禄にいとゞ御悩重らせおはしければ法
皇斜ならず御歎ありし程に養和元年正月十四日六波羅池殿にて終に崩じ給ふ
治承二十一 高倉院上下 内にて八十戒を持て慈悲を先として外には五常を護て禮儀をたゞしくせさせ
給ひければ末代の賢王にて萬人の称惜事かぎりなし一とせ此君御歳十一歳
さかりのころやありし頃紅葉を愛させ給ひけるが大膳大夫信成に命じて二本の丹楓
ある時田舎より仕丁二三人上りてありけるが寒を防ん為に酒を尋ね出しあつめ餘ん
をそかの紅葉を散々に折焼て酒をあたゝめて飲けり信成是を見て大に恐れ禁獄
流罪にも行んとおもひけるを君聞しめて信成歎思ふべからず唐の楽天が詩に
林間煖酒焼紅葉石上題詩掃緑苔と書述せり加程の事をば誰か教へけん下﨟が知
る人ならで只やさしくおぼしけると叡感に預かりけるは人の子細に及ばず此賊思ひ賊女ゆるくを
かく御情をかけさせたまひければ此君を狂者なく英雄と称し奉りける又櫻町中納言重範卿の
女に小督殿とて世に類なき美人琴の上手ありけるが是を召されて寵せさせ給ひ
けるが太政入道姿かくる腹を立て我女中宮の妨なりとて急召出して亡ふべしと聞え
給ひけるを小督殿此よし伝聞たまひ我故に君の御為あしかるべしとて
いづくともなく身ひとつを出給ひけるを君とても何ともなくて夜に内裏を忍び出て
ゆくへ失ひ給ひぬ君是を聞召御悩ありて秋のおとづれ入せ給ひて南殿に出
御ありて月の清光を叡覧ありて哀を慰せ給ひける太政入道是を聞召すに小督


田舍
仕丁等
高倉院の
楓愛樹の紅葉
を折て酒盛
あそび給
舞狂ひ
一夕亭

中宮へは思召入らせ給はねば甚義なる女房達を人も付進らせられずとて中宮をば
六波羅へ行啓なし進らせ参内せさせられける臣下達も妬まれければ入道の権威を
恐れて参る人もなし禁中さびしくならせ給ひしかば御なひ添りしを八月十日余りの
事なれば、さしも隈なき月なれども御涙に曇りつゝ朧にて只空なれや小督殿の局へ静かに
主上人やある誰かあると召されけれども御いらへ申者もなし折節弾正少弼仲国
参りけり仲国参りて候と申せば小督ハ嵯峨の辺に片折戸したる所にありと聞召して
御使に仲国畏つて小督殿は一とせ琴引給ひし時仲国御笛の役に参りし其琴の音
忘れず候へば聞知り候はんかし今宵ハ八月十五日の月の折からなれば
隠れもし君の御事を思ひ出られて琴弾ぬ事はよも候はじ何処までも尋進らせん
急ぎ遊ばされよとて御書給はりて十六夜の空をや否と申ければ君御寮もとて
御嬉しげに御書遊して仲国に給はり寮の馬に乗て仲国明月
に鞭を上げて西をさして歩ませ行く八月十五日の事なれば嵯峨の辺の秋の
愁らんわづかにありし在原業平が男鹿鳴く此の山里と詠じけん嵯峨の辺の秋の

頃さこそと哀にぞ覚えける片折戸したる所を見附ては此内にやおはすらんとひかえひかえ聞けれども
琴弾く所もなし廻りて二三返まで聞けれどもわずかに鹿なく甲斐
ぞなき月の内裏を出でし時は心を憑しかども今宵ハ空しく帰らんこそ悲しけれとも
思ひしが扨何方へか落行給ひけんといへども王土にあらざる浦郎を隠るべき
宿もなし扨文君の御歎誰人か慰め進らせんといひながら又は将衣の袖を絞りて良久しく
ぞ立やすらふ君を捨てて法輪の程遠からずそれも参ばやとて其所へ向ひ歩ませ
行く亀山の辺近く松の一叢ある方に幽に琴ぞ聞えける峰の嵐か松風か
尋ぬる君の琴の音か覚束なくは思へども駒を早めて行程に片折戸の内に琴をぞ
引すまされける控へて是を聞ければ少しも違ふべくもなき小督殿の爪音なり楽は
何ぞと聞ければ夫を想ひて恋ふと読む想夫恋といふ楽なりさてこそと仲国腰より笛取出し
ほとほとと打たれば琴をば弾やみ給ひけり内裏より仲国御使に参りて候といひ門を
叩けども答ふる人もなし良ありて内より錠をはづし門を細めに開けていたいけなる小女房
顔ばかり指出し人違ひにて候はん是は所違ひにてや候らん九重の内裏より御使

給へたるさま所ふかくこしひろれを仲國中しくこさかく過半せし門えさく乗うるかんとこひろれを
押開き我へ母ひろれ妻戸の縁ようやくるるきいふ所やれ御さ母ひやくおかつ侍れ奉ん君
を御きへふこゝに入てとおもてくはやく供御をかしつめ所侍をかせ御度を命せ給ひて御
命を花く見えさせ給ふ所ふりかへりてうの侍をうへの御ものや男を侍ん御書の作をく
取出りくきを給ふなるたりける小女房小督殿ふ進らせる書を開き見ぬ心実も君
の御書こゝろ哀ふ和歌をしくれを御書紙類ふまてのひいふせんとを注ぬさてぬぐふ
朝ふ夕のむ月言いこゝ人出りて雲井の空ふ月新ふ涙の袖ぞ玉垣ぞるふ仲
國ふ病んも分苦しくこそ御ん君をこゝろく御ん君をはあをたくこゝ引もとび女房の装束
一重ての給へ簪れそこ人推出さる所御所見所と覚くあるまこ仲國給へ左の肩ふ打ケ
て中なるい鈴の御使をくはくふ御ん君のうへをこゝ人ふ作りもとる内裏
にく御琴遊されしく御笛の役ふ仲國あをめされしぶそ神をよを御忘れあ命
いまこ御ふれかゝを御ん君と直ふ義く奏聞申さるゝ世御ん君をふ督殿ふ
世ふ発しくふちかく出くまひるいさこは義を甚ふを聞ふ子摂ふ入道の殿中を

怖さ事どを申さと安御しこゝ御ん君ふ存くわきも憂国拙見を君の御所も御
ゝるしいづくいふ所ん所ふそも我身を人ふ義情も失ふんとこひ内裏をは潜ふ恋び数
いふ所ん国ふのを入ふいふを成べるらしく御ん君ふ恋も御
御言傳をもや義るをこひ所縁あるこくふ所ふ武行侍ふ頃れいるも懐を義る事を
形しこゝ人ふ中こ身も苦しく昨日ふ内しこゝ大原の別所と奉ん所ふ作ふ今青きまこの
限の名残をおしこゝ主の女房ふ勧られ子則しく琴を忘れく今歌しを引くふ安を
宮御所ふて御ひろれふ仲國も衣の袖緒ふ御ひろれふ良宵くふ中なる
大原別所と義れふ御様式ふ世ふ世ふ御ん君の御兎も安ふ事ふ御姿を義を世
孫ふ世きふ様ふも重く御使を仲國参作しこを作せ作しも左おく
出しこゝ進こ世孫ふ世ふ主乃女房ふ中ふ召具しこゝ馬部右衛ん二三
人留ふ世の家を守護せこ世我身を内裏へ馳参り雷ふ内裡を変刑斗ふ出
たまこゝ通取源滅亡の原に迷ひ行く秋の歌長しこゝ内裏へ入こゝ糸ふれ
歌を中のくと明ふ君を定く御疲を世たるこゝ御ん君を雅を奏しこゝ

元八裝束をなし駒馬の傍まゐりけり察の御馬武士共せく南殿の方ゆさゝめく見進
されいまぞ入御をあくさるとりわ秋於乃御座御しく待兼させ給ひ
仲國ゆ参るを御覧ずして詩を一首吟じさせ給ひけり

南翔北鴈難附寒温於秋雁
東出西流只寄瞻望於曉月

中御製あり仲國尋奏進せく作して御返事ぞ上てうきゆさ拍子歌後
わきそ実ゆ智ゆ参りわある垂懸やいまぞ裏ゆあり是伝ゆ上てうを参う
ゆる我とく宣ひ給ぞ御琴の音ゆとやいうある樂をゆ深法ゆ有ゆ仕ぞ想夫恋武
あそ遊び給ひはきく奏さるぞ朕ゆ年武忘れぞゆひ出ゆ久ゆ哀やしそゆ御涙を
もろくと流させゆふぞ哀れゆる雅ゆ召ゆ仕ゆ者を法華講ゆ参ゆて奥ゆて哀れ
とぞ御ゆる仲國参ゆ御前武士ゆ召ゆ仕ゆ者を法華講ゆ参ゆて奥ゆて哀れ
ゆひ給ゆ仕ゆ者も編言ゆ和を申背ゆ参ゆ人ゆ大改ゆ道ゆ聞付ゆ給ゆ人ゆと
宿所ゆ帰ゆ牛車ゆ変ゆして源氏ゆ参ゆ御前ゆ召ゆ出ゆ給ゆ仕ゆ者ゆ我再び

憂目ゆ逢ゆ人ゆ代ゆ世ゆ義ゆ世ゆ者ゆ御ゆ前ゆ召ゆ出ゆ給ゆ仕ゆ者ゆ女房揃ゆ御ゆ簾ゆ内ゆ
を隔ゆ内裏ゆ参ゆ君ゆ御前ゆ召ゆ出ゆ給ゆ仕ゆ者ゆ女房揃ゆ御ゆ簾ゆ内ゆ
ゆ人ゆ出ゆ給ゆ仕ゆ者ゆ女房揃ゆ御ゆ簾ゆ内ゆ
ゆし給ゆ仕ゆ者ゆ女房揃ゆ御ゆ簾ゆ内ゆ
失ゆ人ゆ君ゆ御ゆ前ゆ虚ゆ言ゆ者ゆ女房揃ゆ御ゆ簾ゆ内ゆ
ゆる季ゆ定ゆ義ゆ者ゆ女房揃ゆ御ゆ簾ゆ内ゆ
ど紙ゆ乞ゆ人ゆ者ゆ女房揃ゆ御ゆ簾ゆ内ゆ
ゆ人ゆ者ゆ女房揃ゆ御ゆ簾ゆ内ゆ
ゆ所ゆ奥ゆ者ゆ女房揃ゆ御ゆ簾ゆ内ゆ
衣ゆ御ゆ者ゆ女房揃ゆ御ゆ簾ゆ内ゆ
ゆ武ゆ者ゆ女房揃ゆ御ゆ簾ゆ内ゆ
智ゆ局ゆ者ゆ女房揃ゆ御ゆ簾ゆ内ゆ
ゆ孫ゆ者ゆ女房揃ゆ御ゆ簾ゆ内ゆ

あくぢ平家を下國の守ぬぐふもこゝろわるく思ひ給ふ
の振舞ふかしとて世の人こゝろ穏ならず
られのいとかなしくをぼしめしたるに
通ふあひだ御所の惡しくうとましく
只我のおぼえ御ひいきせられ長元年後御慈悲
ふ打續いとく南都北嶺の衆徒

木曾義仲揚義兵

あふ信濃國安曇郡木曾と云山里に木曾冠者義仲と云人あり故六條判官為
義が孫帶刀先生義賢の次男之義仲あとを取伯父義賢の國
多胡郡秩父郎重澄が書るをり義賢武蔵國比企郡へ通ひける久寿
二年二月十五日馬頭義朝の嫡男惡源太義平相模國大倉の口まで討て出る義
賢を義平おい叔父あれども本者也惡源太と云從父兄弟と父分討れける時まだ
を二歳名を駒王丸と云惡源太義賢城討て上洛しける旦山庄司重能
にゝひ恐るゝ駒王丸を乳出して必害もべし生殺はたゝ後悔あるべしと重能懸
義りぬといひ入りしかども いのゝしてこの二歳の子ゆゑ不便之とぞひくれ義朝
義別尚真盛が武蔵へ下り給ふを悦びて駒王丸を母ゆゑ乳くれ書ひ申しかの
ゝれを真盛清取て七箇日を過て業ゝ
討まゐらせを甲斐ゆゝ討せ申せども身の煩さるべしとて木曾の山法師の中三權
頭と云者あり此ゆゑ憑しくとて人と成なばまとも憑おもしとそ母お懐ゆゑ
遣て 神義別尚情あり母の懐ゆ抱て信濃へ逃て木曾中三權頭お見て我い
女の腹ゆ少しく養ひ立作とも賞ゆ深く和義を憑ゆ書ひ立て百ゆ一
を世ゆ有る事もなのいかとも業ゆとし後へ勇ゆ従者ゆを仕ひ作へとゆ
義れとゆひ給ふ人ゆ三ゆ八幡殿ゆ四代の御孫ゆ世の中ゆ例を瀬ゆなる物ゆ
今ゆ我ゆ孤ゆ成ゆ御ゆ成ゆ武運開ゆ日本國の武家ゆ成ゆ
いとゆ名ゆを書ゆ立て小陸道の大將軍ゆ成ゆ
名ゆ残ゆ木曾の山下ゆ所ゆ隠ゆ世ゆ廿餘年ゆ間育書ゆ

弓矢取て人に勝れ武勇に馬に乗て巧なる人なり保元の合戦に源氏悉く亡びぬ
るに木曾七騎の雅心に安かりしかるに平家滅亡の後平家滅亡討戦て世に
馳弓矢射るるもられに平家を責て死を求ひ
我に孤子なるを和義の育に入て成長せり
ども八幡殿の後胤にして二門の宿敵を徐に足くべきに抜て平家滅亡して世に
やと存じいくに有しかや世間の人兼遠怪びく思を今まで育ひ置ける
其年に成り弱く勇て云られば其後を本者移をの謀計をめぐらして来
都へも及ぶ世上に窺ひ行山陸に張れ居く人おもかくしを見るれぞ
を六波羅に行窺ひしも平家の運尽ざるを移を本意成遂さり給るに高倉宮
の令旨成給ひるるを今に隠に及ばれ通に謀叛を致し国中の兵成駆催て
既に一千騎に及ぶ南国木曾に所を定竟の城郭長山遠に連く禽獣希に
して嶮岨屈曲の渓谷を大河隔て人跡又絶り谷深く険危しての足を峙く歩
峯高く巖嶮して眼成載く行尾を越尾に向く谷を推谷を出く谷へ入く思ひを

費に東に信濃上野武蔵相模に通く奥庭く南に美濃国に境道一に口狭く行程三百の
深山に縦横の番騎を設くるに攻寄せ難き程の要害に児孫横行して猟師に馬を人を
通ぶべき所に有ぬ義仲に有に居住して謀叛を記し責上く平家滅亡べしと宣へ
ばいざ木曾を信濃に立て南の端都も近られをもあるいのぐせんと上下騒あり

諸国源氏蜂起馳早馬六波羅

尾張国の国代より早馬成を立て六波羅へ注進を能登新宮十郎義人行家東国の源氏を
成催して数の騎の軍兵を引率して既に尾張国に打入るあひだ国中の土民安堵せず是
より美濃近江の軍兵成相従て都へ攻寄ぶべきよし披露に及ぶ討手を
と云送り給る依之征東大将軍左兵衛督知盛卿中宮亮通盛朝臣左近将監
純薩摩守忠度侍従に尾張守貞泰伊勢守系綱都合三千騎東国に発向
に近江国の源氏名山本柏木錦織佐々木の一族打従て美濃国赤坂に着尾張国の
土民名成打従て五千騎に尾張国墨俣川に陣を張国を防り義人行家を
美濃国板倉に山所に楯籠る成平家推寄て後の山より大成りに攻れば

行家も我義なく同國中原といふ所に陣を取其勢千騎には過ざりけり征東将
軍左兵衛督知盛卿本三位重衡して尾張の墨俣より上流を副将左少将清経も同しく
せられけり其外も美濃國にて下る討手れ使も度々あれども兎もかくも元年も暮
れかりけれども東國の方も北國の方も日に従ひて源氏大勢にて擁し被露しけれバ
さき公しも元来くとて右大将宗盛今度をわきまへ知らしく宣ひけれバ君の御下向あらバ
東國も北國も雅かハ遣背中にてきゆしく雖あんど上下無代して我もくと出立る
人武も武官に備て武を弓馬に携る人宗ハ宗盛の下知に従て東夷に討伐を追討
すべきよし宣下せ被れけれバかく其用意ありける九州守佐太郎司公通が
脚力にて六波羅に着状を披に云九州の住人菊池次郎高直原田大夫種直緒方
三郎惟義臼杵部槻松浦党等同心して謀叛を起し東國の頼朝に與力しくく
西府の下知に従ハしかたり平家の人々手をうち歎くあいの所るべきに東國の乱も
まだ鎮ぬに西國さへ斯くて武者あれバ信し上せく官兵に先をさん上云ひはるに義平
の将門天慶の純友東西に起をなしくて乱逆せしもかしを遠ざる事哉とて騒ぎ
惑ひの又も肥後守貞能を後ハ辟事かくくを作らん畑操の時ハ虚言多きものに東國北
國の事ハ誠に義仲頼朝に相従ふ事もあるべし西海の叛亂ハ平家の大恩の者共なる事を
君をば背進らせん貞能罷下て鎮撫べしと憑しげに乞申ける又伊豫國より飛脚
到来して六波羅に着状をひらくに當國の住人河野介通清去年の冬頃より
謀叛を起して道前道後の境高縄の城に引籠る備後國の住人額田入道西寂新の
浦より押し渡の兵船を以て高縄城に向ひ通清をば討取て候しが其四國の兵
共らざる西海又伊豫讃岐阿波土佐四箇の兵ども漸く今年二月まで伊豫に逗
留しけり通清が子息河野四郎通信高縄城を遁れ出て安藝國へ渡り奴田郷より
三十艘の兵船を調へ兼て其の體にて乗し忍んで伊豫へ押渡り備後に西寂を寵
ゐるをかさねて室高砂の遊君を召あつめて酒遊びする所に押寄て西寂を虜りて
高縄城に将行て磔にかけて父通清が亡魂を祭りけりまた又縄にてなぶり斬に
頸を切られしとも異説口々にしといへども死亡は決定也依之當國には新居武智を
始とし河野に相従ふ由にて四國の住人ことく東國に与力して平家に背けれ

大政大臣
清盛入道
病脳して
炎の如く
身熱なん
比叡山
千手院の
水沸騰
あれふべ

まことやなり又国々なるは徳政別国因那注申堪忍下那智新宮の衆徒若王十
津川の輩ふ到まで花洛を背紀東夷を属せんと抜山倉山の輩ふ
南海西海を繁動せり仏法忽ふ亡び王法あるが如し四夷蜂のごとくふ起れり逆乱の端
相頼と我朝に今元人とこれを公義平家の一門るを貴賤ともに歎
そのいるるとなり大政入道子息右大将宗盛卿を奏せられるは天下を掌中
中のごとく国々ごとのうし法住寺殿所ふ焼ふやいれなるとも法皇を改変そうひ
やさんぐ紀幸も幸国なを見国をそれぞれとうしるとて国々入させ給ひられた法
盛入道をかし弱王法入るる事ふ山門の賊徒頼朝義仲与力同心の凶徒を征伐せ
ひ紀の民宣旨紙を門々に城後国住人余立将軍ダ志業城を郎平資永を陸奥
国住人藤原秀衡と武両人ゲ幸へ下遣されりり

大政入道清盛薨去

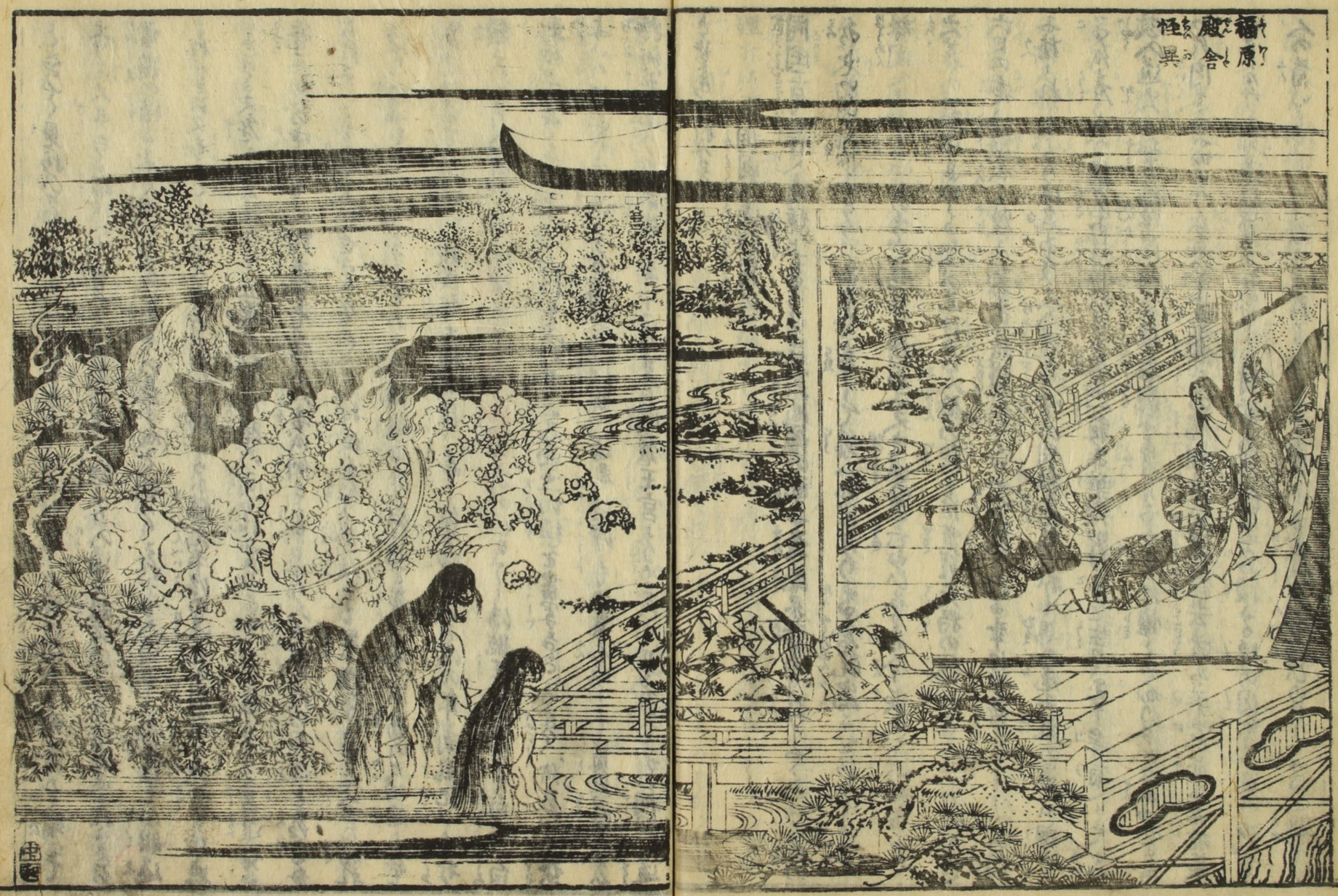
養和元年二月廿日前右大将宗盛卿参詣の勢張引率して頼朝已下の凶徒を
追討の為ふ関東へ下向ふ入ぐ下ふ出ひる時ふ大政入道例ふ病出来り
熱りとして止ひ沸ぬ同二十八日ふ入道重病ふ受給りをく六波羅を中物騒一馬車馳
違ひ倍を往還行くの行儒城作れ家々れ閉ぢ人民ふ喉へ入ぬ物の中熱息をる事い大ふ
ようして湯水ぞ沸ぐ喉へ入ぬ物の中熱息をる事い大ふ
三間ばを人近付寄事ふ能ふ無ふ
ひ紀く騒しき事たぐ事くも覚紀貴も賤も恐しくしく後ひけるを私語けるを
あれ今度存命して東国小田の源氏ふ責殺されぬ人より早く空しく成ぬ
影人とふ人もあり紀備老の眼骨肉の情られば二位殿を始ひ公達兄弟ふ至る国々大
ふ歎ひられ国々いふ事ども操をあられ唯あ行を果て捨おりしる牛馬の頭金銀の
寶七珍六畜引出し取運び神社仏寺ふ抛れしも病疾国々重く成ふ験色
誠ふ道れば紀定業と捨見えるるふ人も恐ひ紀二位殿抱の中ふ
正家の殿ひく泣く宣ひるるは御号日々ふ沸して湯ぬくもとさせ給ふ神ふ祈る仏ふ
願ふ事を斜ふ申ふ紀ふ願もなられぐもいふを叶ぬ事も覚紀今ふ偏ふ業の事成
思ひ捨給ひて後の世の事ふ助ひんと思ひ給ふ又沸ぬふ事ふ作ぬ紀作ぬ宝

も入道よふかくしげふかく大息はきて我平治元年より以来天下を手に把て万乗も心の侭く諍者も弱く悔る所も無し遠ざく害なれば時日を移さず亡し失ひしハ草木も靡ざるといふ事なしかくて勝ふ廿三年就中官位太政大臣に昇りて十善帝王の帝祖なり子孫兄弟栄花をひらき当今の外戚たり官職残る所なく何事も心に叶ざる事なし遂生ある者ハ必死するハ習ひなれバ入道一人惜しく思べき事にあらず但遺恨の事とてハ頼朝が頸を見ずして死せる計ぞ思ひ残されて冥途の障とも成るべし我いかにも成なば堂塔をも建ず仏経をも供養せず只頼朝が首を切て墓の上に掛られのぞ我孝養の報恩とも草の陰より是を嬉しと思ふべし是ハ我を我とこえ者共子孫も侍士も聞伝て必ず一ツ事として努々辞し事勿れと遺言し給ひけるに二位殿も公達もいとゞ羅涙く聞ゆ同四日入道ハいとゞ病に責られて焦熱堪がたく見へ給ひければ百人の支を立て追々比叡山の千手院より水を結び下して石の船に湛く入道其中に入て冷し給ひけるに水も湯と成る若痛ハ止ざりければ板に水を注て伏まろびて冷し給へども猶も助かる心地し給はねば医療も術道も験を失ひ神仏の祈誓も空が如し終に治承五年閏二月四日ニ中に悶絶躃地して周章死に亡給ひぬ馬車馳違ひ貴賤急ぎて京中六波羅塵灰の立事煙のごとし一天の君をもかくいおそへらぬ勢しく同じ命しかざる分野より入道今年ハ六十四に成ぬれバ老死といふべきにあらねど宿運忽ちに尽て天の責遁れ難かりて、なる願も空く祈も験もなし身に代て命に代らんと契りし数万騎の兵も冥途無常の責をば防難し閻王奪魂の使にハ戦者のがれし父母兄弟及び妻子朋友僮僕等に珍宝死去く二たび来る事なし悩親しも只唯黒業なり常に随逐して説きまする冥々たるに業の道筋くる死の山妻子眷属ふり捨す只壱人で去るる其金銅十六丈の盧遮那仏を初として南北二京の大伽藍数大小の諸聖教焼失し其ゆへにこそ亡びぬる後の世の苦患も立ひなされて無懸なり入道の日病つき給ひんとての夜其内の女房ハ夢に見たるハ八葉の車に火を點て燃る中に無といふ字只一ツ書たる織のれあり青鬼と赤鬼とが牛に立てかの車を福原の入道の宿所の東の門へ引入れてあり女房の義乃ち頭に見ま乏

いぼうとう何事ぞと問へば鬼答てわれは閻魔大王の御使ぞ獄卒
せいこうあく聖武皇帝の御願日本第一の大伽藍金銅十六丈の盧遮那佛を焼
亡し給ふ故あて大改入道流罪を蒙ぜし人車にのせられ女房恐しく流涙とゝひるがゝ
備あの獄の札ぞと問へば鬼答て云入道佛像經堂悉く
焼亡ぶく既ぶ五逆罪を犯せり永阿鼻大地獄ぶ堕ぶく無間の重苦受ぶ無間
の無乃驗の札ぞと申ば見ぶく義ぶ答ぶ乃ぶ沈ぶ程ぶ乃ぶ熱
汗を流して恐しぶ人ぶ殊ぶ叫ぶ女の女房一ぶ人ぶ語ぶ苦ぶおのぶ化ぶる甚ぶ後ぶの女
房ぶ申ぶ例ぶ申ぶ悩ぶ二七日ぶ申ぶ死ぶ乃ぶ又ぶ良久ぶ蘇ぶ国福井
庁ぶ司後方ぶ南都の軍果ぶ物ぶ申ぶ突身ぶ責ぶ呼ぶ死ぶ
乃ぶ入道の病ぶおぶ申ぶ三箇日の中ぶ突身ぶ責ぶ呼ぶ死ぶ
の然ぶ申ぶ晴ぶ悪事ぶ去事ぶ有ぶ乃ぶ先帝高倉院崩ぶ後ぶ一天の怒九重
理ぶ法ぶ化ぶ義ぶ同七日六波羅ぶ焼上ぶ骨ぶ国實法橋貴ぶ申ぶ福原
ぶ納ぶ乃ぶ骨ぶ執ぶ思ぶ所ぶ所ぶ化ぶ羅ぶ悦ぶ申ぶ

平相國入道非常人

同国二月七日入道焼上ぶ乃ぶ怒六波羅の前ぶ舞ぶ者ぶ有ぶ焼ぶ
ぶ申ぶ申ぶ二三十人ぶ者ぶ乃ぶ焼ぶ乃ぶ倉院ぶ乃ぶ天下
緑園ぶ申ぶ陰ぶ申ぶ晴ぶ者ぶ乃ぶ又ぶ乃ぶ亡ぶ申ぶ今ぶ六波羅ぶ
六日の夜八條殿も焼ぶ乃ぶ天狗の所ぶ
ぶ申ぶ入倫の態ぶ乃ぶ
ぶ申ぶ入道ぶ存命の時秘蔵せ
政入道大ぶ驚ぶ乃ぶ陰陽頭安倍泰親ぶ
内ぶ人ぶ乃ぶ平家滅亡の
申ぶ乃ぶ又入道薨ぶ申ぶ
人の首ぶ乃ぶ


福原殿の怪異

[illegible]
大サ三尺斗なる服四丈十方にて八道をは將と聞くに八道も眼ばひしく白服迫れば[illegible]
雪霜の消るがごとく成ぬるが又一丈斗の長ふ成て眺りされども八道かゝーと恐れを白服迫
されば[illegible]又ものゝくとうえんおりわもれ[illegible]を推まるふ保元平治の逆乱ふ討れし死靈と怨恨
なきなる又在ふ怨霊ばかり五葉の松も汗時乃間ふ枯ぬる[illegible]不思議なる又召連れる
[illegible]三百人の中ゆも天狗あるて常ふ大本成例さ[illegible]八道最後の有様を見[illegible]
らばされども真人ふおゆをざるやらん神祇を敬ひ佛法を崇ひし事ふ人ふの勝れ
[illegible]の八道を呪人ふ知らざる事あり擁護國安庫ふ納為を集し事不易の大功德と[illegible]
[illegible]の為い義安年中阿波民部大輔成良が義く[illegible]初りしを次の年南風紀つく[illegible]
[illegible]されども八道はしく氏神成[illegible]人力ふ叶ひがたし海龍王を賞んして白馬ふ白
[illegible]紙[illegible]を書き人[illegible]く人相をかれ甚だ石面ふ一切經を書写ふ[illegible]め甚だ[illegible]紙りんく[illegible]
上さの備[illegible]經[illegible]ふ[illegible]國川辺[illegible]清澄寺の慈[illegible]場して[illegible]
持經者あり[illegible]永安二年十二月廿日[illegible]閻魔王宮よりめされく四月の矢をかの相國入道

ふ事ふ[illegible]紙食ぜ[illegible]れく積生[illegible]れいり清盛公を慈悲[illegible]の再来[illegible]
[illegible]跡ことゝ[illegible]れく大權の化現方便をめぐし實業の流生成行[illegible]
の貴成示し盛者必衰の理を[illegible]

紙園女御　此条一巻ノ始末

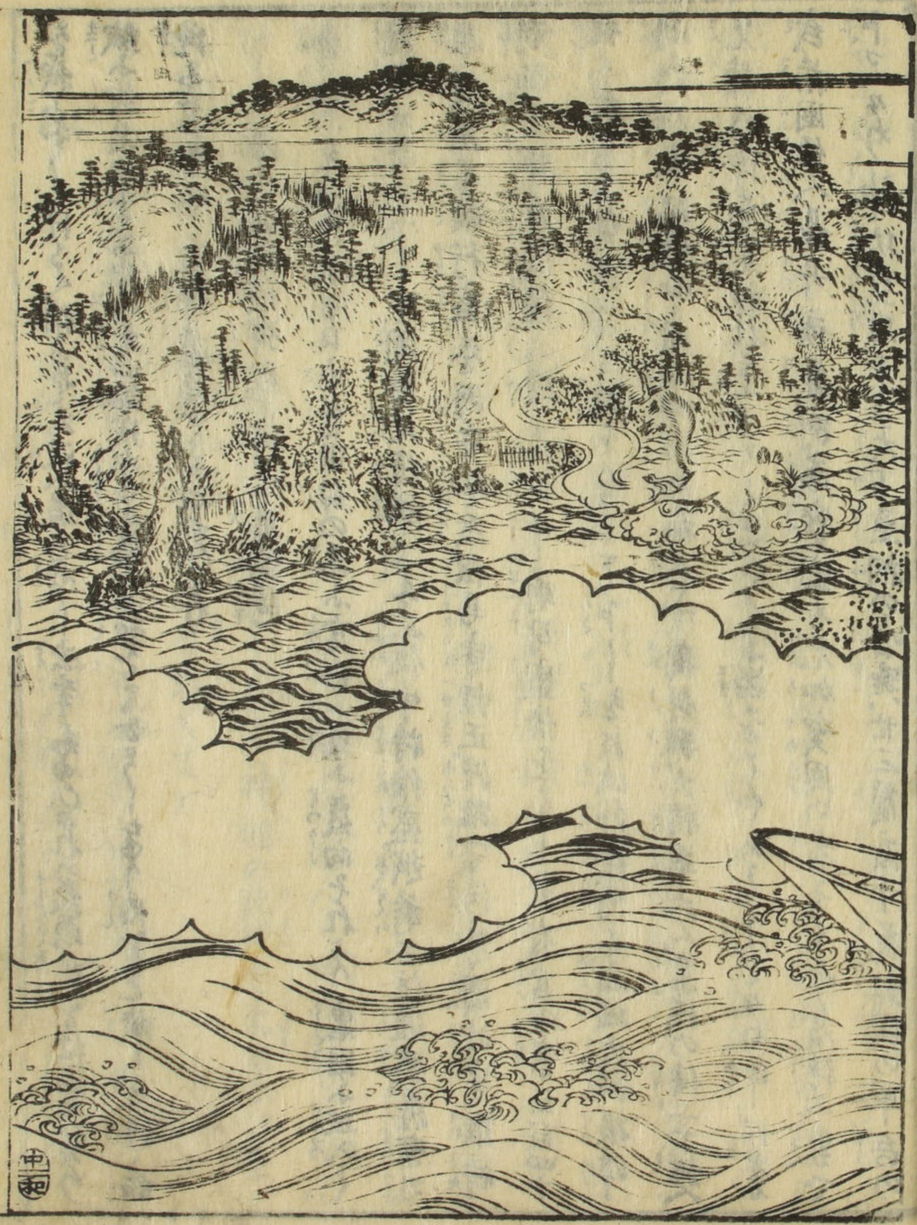
或曰清盛を忠盛の[illegible]兆を白河院の御子と其ゆへいかの帝感神院を信じ給ひ
[illegible]ある時祇園の西門の下れ大蟒ふ蘇し[illegible]女出く清幸成[illegible]帝御門ふ
[illegible]て還幸の後宮中ゆめされく常ふ玉體ふ迫ばこなりり祇園社の巽ふ御所成
[illegible]て居られ[illegible]あれを祇園女御と称ふ人おるく
平忠盛小面ふ[illegible]御所あり五月廿日御幸の時忠盛人おるく
れ[illegible]へとぐ公細さ折ふ[illegible]ふ祇園林の南門より光物[illegible]
むり。光くい消きくくの又さりとこりり。光ふ注のく其姿成敵[illegible]あれど頭を張ん
升のぬくこゝめ[illegible]る髪生ひ下生ぜて右ふ[illegible]の撮る物成持左のまゝい光物成
持くこゝ門と光る隅を御公を逆し供奉の人さる魂を消く是を驚を[illegible]鬼く

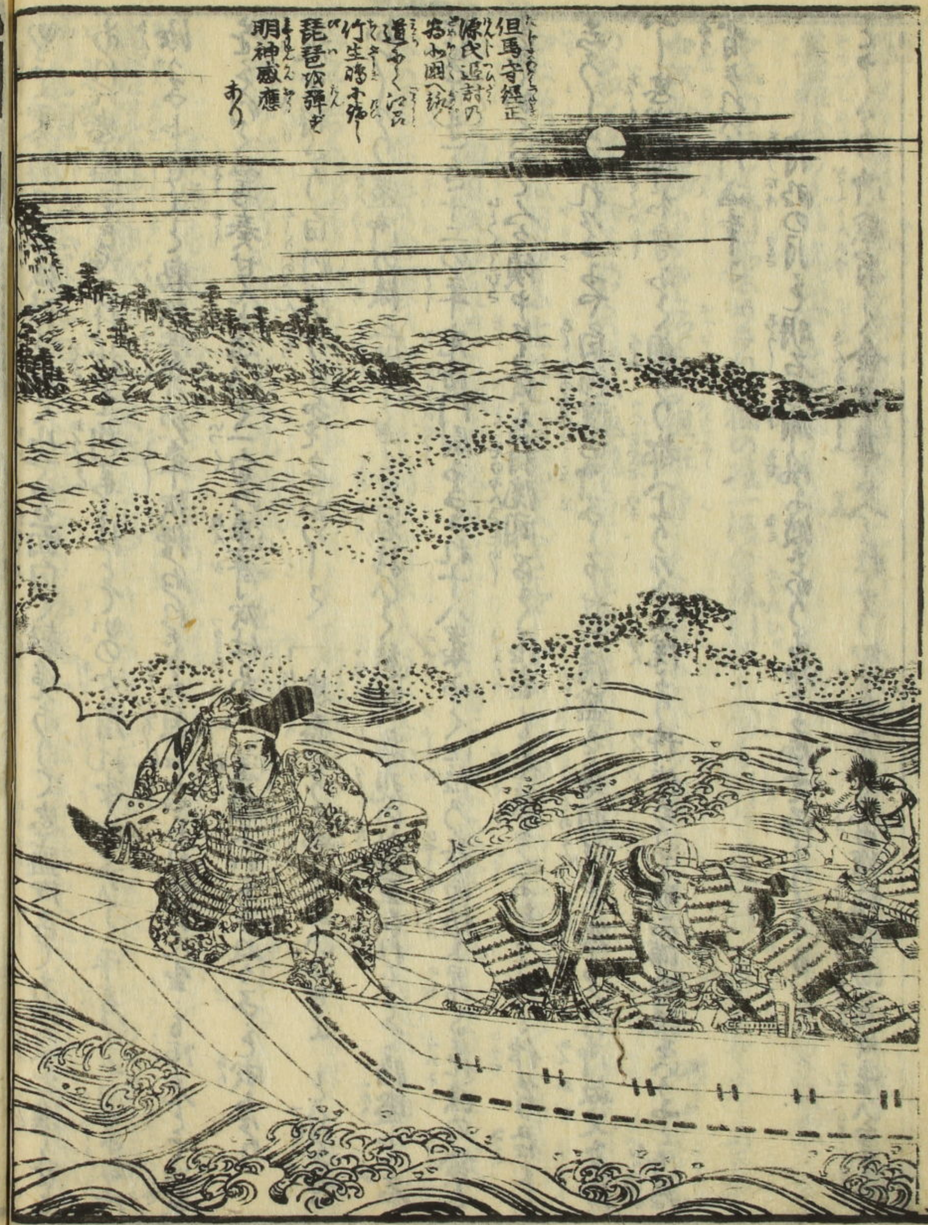
手に捧たる物ハ聞ゆる打出の小槌なめり恐しくとて御車ぞひの雑色どもはさはぐ忠盛に
目もくらむ光物なく進みせよと勅定あるに忠盛を畏まり承つて今すこし寄
近く寄て鬼ならば喰れん事疑なし遠矢に射殺さんと思ひしが矢をば弓にとりつがずして引ける
が捻らずして来し物をたとひ鬼神にもあれ忠盛が下に助かるべし況や実の鬼
にあらじ祇園林の古狐などが我を欺くにてこそあらめ無念なりや射殺さんより生捕にせよと
勇みたちて心をしづめつ青侍衣装上ぐるの下に持つ萌黄の腹巻に細身造の太刀帯て葦毛
の馬に打乗りて勢ひを持て先なるよりしづかに寄り付かんとする時馬の前に進む
けしき光る忠盛馬より飛下り傍なるやいなや懐へ手取に取らんとする所
と云声ハ人なり己ハ何者ぞと問はれしに此社の承仕法師にて侍ふが御寄進の
灯明にて御燈進らせんとて参りしと答ふ続松を出して見ければ実に
七十余の法師なり雨降ければ頭には小麦の藁を戴き右の手には油の小瓶を持ち左の手
に土器に火を入て持ちしが時風にさそはれ火消えんとするを袖にて覆ひ止めんとするひまに
時々火の光の藁にうつりて銀の針のやうに見えたる也事の様子一々に顕れしかば上皇
今ハ御悦の餘りあまり斯程の者を切殺し射殺さんには不便の事なるべし弓矢とる
身の遠慮ありとて忠盛が御感に預りける今の蓮華院と申ハ此祇園女御の
所の跡なり　今の祇園林の東双林寺の北の方に鷲尾山の麓なり
夜泣児院の由来
去程に忠盛殿上の御番にあたりし折々小夜更て高燈台の灯ほのぐらきに或女房
通りかかり忠盛を見て袖を引て女房さし出して一首を詠む
おぼつかな誰そま山のくれ人ぞとよ此暮にひくなをとふはや
忠盛とりあへず返事に
雲間より忠盛きたる月なればおぼろげにてはいはじとぞ思ふ
と申て女の袖をはなちて此女房と申ハ五条局とて紅顔雪肌たぐひなき情も深かり
けれど白河院寵愛なく思召れける女房御前に参りて其の事かくと申されければ
忠盛くしてかく御前にめされ朕が許へ参る女の袖を引たるとて忠盛もしや浅猿
と色を失ふて獄流罪にもやとて汗水に成て振ひけるが程なくての御前に女房を

孫うつりかれぞ海を渡りて遠く返事申たりしとかや諸新古今遠新古今女院賦るく事
其罪法のごとく況や女を寵愛しかりしかば優婆塞のごとくに返事申なきい感ぜるく
世の局を清涼殿にめされ一樹の陰一河の流引るく局も引るく忠盛も契あさからずとぞ
女院海に賜ふと和歌仕ある個姉身にて五月に成とて男子なくしかば海げ子にして弓馬
の家を絶せじ女子ばかりに勝ふ返進せしかども下されり忠盛大ふ慶び女の神祇引く蒐
出ね歌をは日本に生れて仏菩ふつる事くなり只歌産の罪祇遁るくのことふ難ぞ剥へ
帝代の面目祇絶君の明徳聚道の陽羅中階下みか感涙を流しかりもれも祇ふ
二世の契忠愛念類ひなくして月見祇果しく行ふ甚朝夕を隔しかれを産平らかにして男
子を生て修び事斜なりしかば此子生れしかりより最涙絶じ忠盛大ふ歎きいかでせんと嘆
て然歟山へ参りて祈り奉る泉涌寺殿の戸を押ひらき清涼殿の戸を押ひらき清涼宣とおぼしくく
夜泣せじ忠盛たてまつりまい清く法りふる事をまねをあ者
忠盛怪び神祇祇授ふ最涙を忍止りなるべし氏る三家の時保安の秋白河院熊野
御参詣あり忠盛北面ふく供奉せり鹿山を祇さ殺ふ倦ふ暮顔の夏殺ふ
叫つと雲解ふ祇法ゐく生る面白く感涙ありて忠盛祇召てあの殺を進せと
あれば忠盛参解ふ扎枝を折事ばとそいの女房れ事祇ふく平産して男子ふ六
海ふ子世せよと勅祇蒙り紀年祇絶ぬれたる思ひ忘られ強ふ人生も所人として法ふ
をふ向く鷲奏せんと思ひく一旬の連寄祇仕ふ「遠行ふいとがぬうふ成ふり
是を指ふり白河院折ふ法を世ふりく「忠盛とりてやしまひおせよ」と付ふ世
ふりかり還御の後三家とも冠ひく熊野権現の能宣ふれとして忠盛と名
法号ふ十二の年左衛門尉ふ成られ十八家ふく但位の吾海仏ふ昇る花族の人と
出家ふく人を傾ふ名祇名羽院聞召く清盛も花族ふ人ふおとらじと作ふり君も
ふりかりられる事や白河院の御子とやせい清盛を鳥羽院ふい思ふく御叔父なる所
ふ忠盛備前守ふく関より都へ上りなる院より御使ありて明石浦の月ふいふと御歌
有られば御返事ふ

宵明の月を明石の浦風ふ波を吹ふ玉藻とり所をみえ

とかりふり御感有く金葉集ふ入られふり




但馬守經正
源氏追討の
為わ國へ渡り
遥かく江ゝ
竹生嶋へ詣
琵琶波弾ず
明神感應
あり

を我子やうにけうこ備ふ我と大政八道をおさめ去年和ひられ蓋恵りをほこりひろり
城ふ拵るべ死年ふ一天四海城密ふ極り若をもおうこをり居をを城しめり始
絶ふ我をおりれにも都遷はくも心ひろり

源氏退討使彈經正竹生島琵琶

壽永二年四月十七日木曾退討の為ふ宮吾心國ふ發向それより東國ふ攻ふく
頼朝城諸をべ〜空聞ふ大將軍ふ三位中將維盛越前三位通盛薩摩ふ
忠度龍馬頭行盛參河守知度個馬守經正淡路守清房讃岐守維時
刑部大輔度盛侍大將ふい城中前司盛俊をもく先有宮の密三百四十
侍人武勇ふ携ふ者を数を率〜こ〜〜を〜〜氏外藏内を山城大和摂津
河内和泉紀伊中國九州の兵都合十萬餘騎大將軍六人宗法の侍二十餘人
先陣後陣を定われ先々と思ひくふ駒をもやめくトヒ中ふ出
武藤國住人長井兵藤別當實盛を元加賀國の者ふ今度特ふ勇で
トヒ名り神功皇后より天下亞相の合戦、廿三箇度十萬餘騎の軍兵の

一方ふ進む闘を氏度ふ七箇度ふりそれども大將六人まで歩立ふ年を為ふ
まどめなり六將軍十萬餘騎を率して洛中城出られ異國をもく氏
我朝ふは何者ふ向ひまべき源氏名聞ふ氏度乱を起し今度跡形も形く
滅びおんぞ名あるゆしの事やと我京中の上下旬けふ先陣を北陸道ふ
ひて今津海津をおもく荒乳の中山ふ引く天然の國境を塞く敵
突陣ふ着に名り個馬守經正を詩歌管絃ふ長ト形ふ人ふ情ふ乱人ふて
ひて孔の中ふを白波〜ふ四五人相具〜ふ和ふ思ひ寄く所生徒ふ
集り弦ひ通夜〜琵琶ふ琴ふ引樂二ツ三ツ彈ひて後ふ上玄石上ふ秘
曲ふ彈ト弦ふ社壇のうえより白乱狐出来り意上ふ進んぐ經正の方を守を
けるを我を不思議なを個馬守を琵琶を聞く神明の化現を表ひ十をば
所願成就疑ひ〜和光利物の思ひ有難くて

千早振神ふ祈のいをんぞや志為人を色のあ〜れふり　經正

ト我弦ト弦ふり甚後狐こうく中鳴く社の後へ隠れふり遥ふ甚琵琶狐

竹生島の明神ゝ奉られ給ひ琵琶もいとゞ名物なり樂を目出度祕曲く
ゝも究竟の上手なり明神納受し給ひ霊瑞更ゝ新形り来たりて
色おびゝたゞしくなるゝ後色厳ゝかなんとゝ高貴を回らさく描なれと絶正い姫城を
覓来れしとゝく郎等ゝも浅間奥くし神の浪とゝ立て海津ゝ
浦へ漕ぎ着ゝ給ふ

源平盛衰記圖會巻之二終